

秋田城跡歴史資料館年報 2022

秋 田 城 跡



2023.3
秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報 2022

秋 田 城 跡

2023. 3
秋田市教育委員会

序 文

令和4年度の秋田城跡発掘調査は、焼山地区で第117次調査を実施し、奈良時代から中世にかけての遺構・遺物が発見されるなど、多くの成果をあげることができました。

第117次調査では3地区にトレーナーを設定しており、A・B区では、土壘跡や材木堆跡、溝跡などを発見し、14世紀代と16世紀後半に城館として整備したと考えられました。また、C区では築地堆跡を発見し、焼山地区における古代秋田城の外郭線について把握することができました。

これらは、史跡の保護・整備・活用を行う上で必要不可欠な情報であり、今後、これまで継続的に調査してきた焼山地区の研究成果を総括した正報告書を作成していく予定です。また、正報告書刊行後には、今回の成果を復元整備に反映できるよう検討してまいりたいと考えております。

このように、秋田城跡の発掘調査・保護管理および環境整備事業を順調に進めてこられたことは、文化庁および秋田県教育委員会をはじめとする関係機関ならびに環境整備指導委員会、そして地域住民の皆様の多大なるご指導、ご協力の賜物であり、心より深く感謝申し上げます。

令和5年3月

秋田市教育委員会

秋田城跡歴史資料館年報2022

目 次

例言・凡例

I 調査の計画と実施状況.....	1
II 第117次調査報告	
1 調査経過.....	2
2 A区検出遺構と出土遺物.....	4
3 A区基本層序および各層出土遺物.....	9
4 B区検出遺構と出土遺物.....	11
5 B区基本層序および各層出土遺物.....	14
6 C－1区検出遺構.....	22
7 C－1区基本層序および各層出土遺物.....	22
8 C－2区検出遺構と出土遺物.....	22
9 C－2区基本層序および各層出土遺物.....	24
III 考察	
1 第117次調査について	47
2 古代秋田城北西地区の外郭線について.....	51
3 中世城館としての焼山地区とA・B区の調査成果について.....	51
4 第117次調査の成果と課題	52
IV 秋田城跡公開活用事業.....	56
V 秋田城跡現状変更.....	58
写真図版.....	59
報告書抄録.....	74
秋田城跡歴史資料館要項.....	75

例　　言

- 1 本書は、令和4年度に実施した秋田城跡第117次発掘調査、秋田城跡公開活用事業、秋田城跡現状変更の記録を収録したものである。
- 2 本書の編集は神田和彦が行った。
- 3 遺物の実測・トレース、遺構図の作成およびトレースは、神田のほか、整理員の森泉裕美子、伊藤雅子、宮田美奈子が行った。
- 4 遺構・遺物の写真撮影は神田が行った。
- 5 本調査で得られた資料は、秋田市で保管している。
- 6 発掘調査では、以下の方々や関係機関から指導・助言を賜った。記して感謝したい。

渡邊定夫、田中哲雄、木村勉、熊田亮介、三上喜孝、高橋栄一、林部均、近江俊秀、大橋泰夫、
高橋学、利部修、武藤祐浩、磯村亨、五十嵐一治、加藤朋夏、伊豆俊祐、宇田川浩一、
文化庁文化財第二課、国立歴史民俗博物館、奈良文化財研究所、宮城県教育委員会、
多賀城跡調査研究所、東北歴史博物館、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター
(敬称略・順不同)

凡　　例

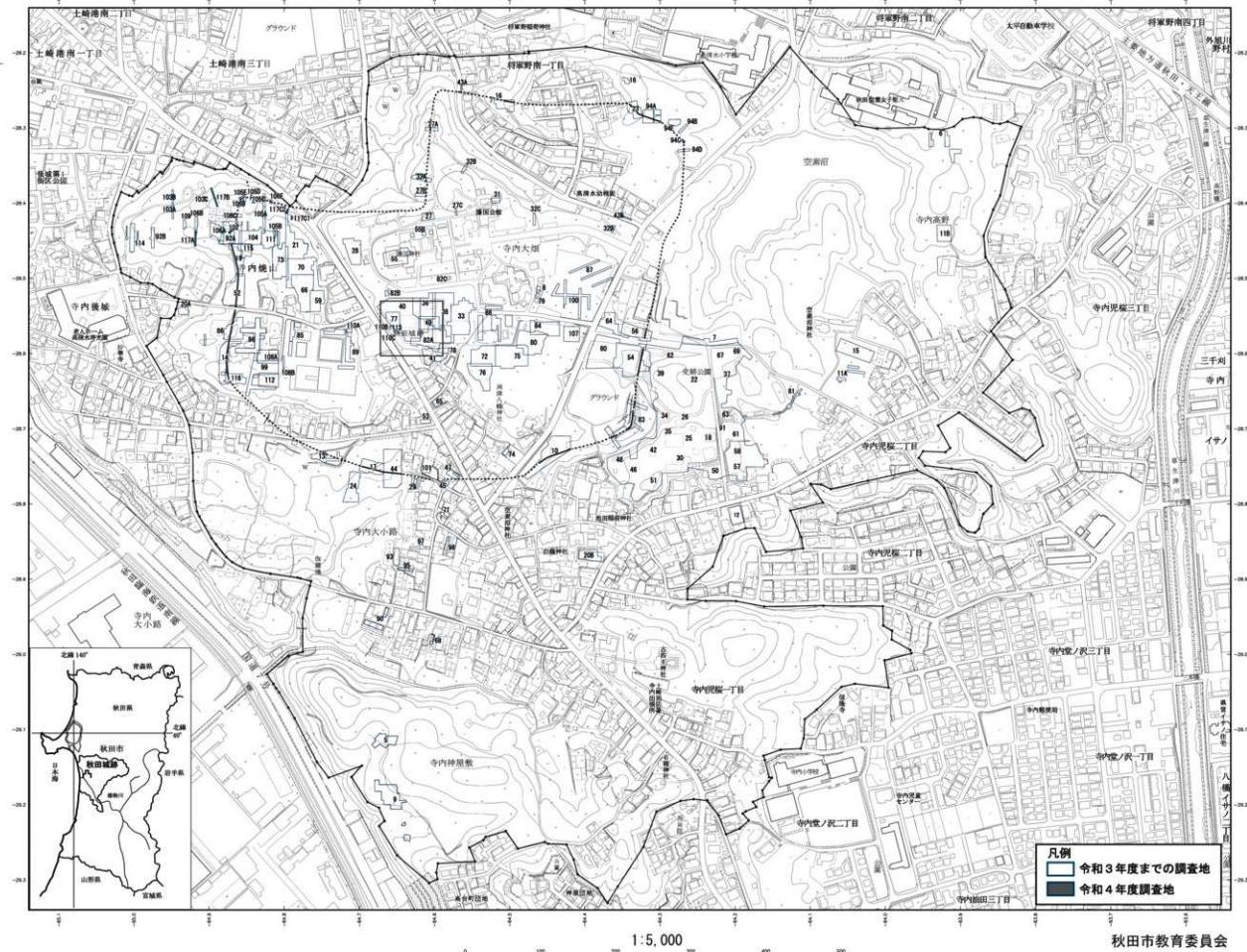
遺　物

- 1 土器の断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器である。
- 2 土器の性格、表面付着物の相違については、下記のとおり表現した。

転用硯  煤 
- 3 土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。
 - ・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。
 - ・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。
 - ・切り離し、粘土紐、タキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽いナデ調整と記載。成形時痕跡の摩滅を目的とし、痕跡が一部残るものをナデ調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧なナデ調整と記載。
 - ・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。
 - ・遺物実測図の縮尺は、瓦は1/4、石器・銭貨は1/2、その他の遺物は1/3とし、それぞれ各図面に縮尺を示した。写真的縮尺は瓦・壇は約1/4、石器・鉄製品は約1/2、銭貨は約1/1、その他の遺物は約2/5とした。

方位・測量原点

文章中および図面の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。遺跡の測量原点は、外郭範囲内のほぼ中央にあたる政庁正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求めた南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてE・W・S・Nと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。測量原点は世界測地系座標で、X = -28,562.592, Y = -64,607.889である。



秋田市教育委員会

図1 秋田城跡発掘調査位置図

I 調査の計画と実施状況

令和4年度の秋田城跡発掘調査は、第117次調査を実施した（図1）。

発掘調査事業費は、総事業費（本体額）5,700千円のうち国庫補助額2,850千円（50%）、県費補助額285千円（5%）、市費2,565千円（45%）である。調査計画は、下記表1のように立案した。

表1 発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査予定期間
117次	焼山地区北西部	300m ² (90.9)	5月1日～8月31日
計		300m ² (90.9)	

第117次発掘調査に伴う現状変更許可申請については、令和4年2月3日付け令3城歴第1655号で申請し、令和4年3月18日付け3文庁第2829号で許可された。

令和4年度の発掘調査は、焼山地区北西部に3地区（4箇所）の調査トレンチを設定した。A・B区では中世城館としての焼山地区北西部について、C区は古代秋田城の外郭線についての実態把握を目的として行った。

第117次調査地A区は、1箇所のトレンチを設定した。A区は中世城館としての秋田城北西部における南側傾斜地の実態把握を目的として行った。調査結果、溝跡、材木堀跡、切岸状造構などを発見した。

第117次調査地B区は、1箇所のトレンチを設定した。B区は中世城館としての秋田城北西部における北側傾斜地の実態把握を目的として行った。調査結果、土壠跡、材木堀跡、溝跡などを発見した。

第117次調査地C区は、2箇所にトレンチを設定した。古代秋田城北西部の外郭線の把握を目的として行った。調査の結果、C-2区で築地堀跡を発見し外郭線を把握することができた。

令和4年7月7日に文化庁近江俊秀主任調査官から指導を受けた。7月23日に現地説明会を開催し、44名の参加があった。12月23日、多賀城跡調査研究所において高橋栄一所長より指導を受けた。

令和4年度の発掘調査実施状況は下記表2のとおりである。

表2 発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査実施期間
117次	焼山地区北西部	123m ² (37.3)	5月11日～8月30日
計		123m ² (37.3)	

II 第117次調査報告

1 調査経過

第117次調査は焼山地区北西部を対象に、令和4年5月11日から8月30日まで調査を実施した。調査面積は123m²である。第117次調査は、3地区（4箇所）のトレントを設定した。A・B区でそれぞれ1箇所、C区で2箇所のトレントを設定している。A・B区では中世城館としての焼山北西部について、C区は古代秋田城の外郭線についての実態解明のため、調査を行った（図2）。

これまでの調査で、第92次調査（平成20年度）で16世紀後半の中世の八脚門と土壘、第103次調査A区・C区（平成25年度）で16世紀後半の土壘が発見されている。また、106次調査B区（平成27年度）、第109次調査（平成29年度）で14世紀代と考えられる材木塀跡が発見されている。このように秋田城北西部の焼山地区の一部は、中世城館として利用されていることがわかってきていている。こうした中世城館としての利用について把握するために、A・B区を設定した。

また、古代の遺構としては、第92次A区（平成20年度）、第102次調査（平成25年度）で外郭西門とそれに取り付く築地塀跡が発見されており、そこから北側には、第106次調査C・D・E区（平成27年度）、第105次調査A区で奈良期の築地塀跡と平安期の材木塀跡が発見されており、外郭線を把握できている。しかし、第106次E区より東側での外郭線を把握する必要があるため、C区を設定した。

調査はトレント設定予定地周辺の草刈り、基準杭測量、調査区の設定を行った（5月11～13日）。その後、A～C区について重機による第I層表土除去を行った（5月17・18日）。

A区では、第I～II層を手掘りによって除去を行い第III層上面の精査を行った（5月23～26日）。SX2599を検出し（5月26日）、SD2601の半裁後にSA2600を検出し、調査区南端でSX2602を発見した（6月7日）。各遺構の半裁・記録化を行った後に、A区全景写真を撮影した（6月10日）。平面・土層断面図の図化を行いA区の調査を終了した（6月13・14日）。

B区では、第I層を手掘りによって除去を行い第II層面の精査を行った（6月10～14日）。第II層面にて、SX2608・SX2609・SA2604・SA2605を検出した（6月17日）。SA2604・SA2605の精査・半裁を行い（6月20～23日）、その後B区トレント東側にサブトレントを設定し掘り下げた。その結果、SG2611・SD2606を発見し、さらに下層からSD2607を発見した。全景写真（7月12日）、平面図・土層断面図の作成を行いB区の調査を終了した（7月14～19日）。

C-1区では、7月9日に第I層を発掘体験教室（参加者9名）で掘り下げた。その後、第I層の除去を行った後に（7月11・12日）、第II・III層を検出し、SP2621を発見した（7月14日）。調査区北端の第II層をサブトレント状に掘り下げ、調査区全体で第III層地山飛砂層を検出し（7月20日）、平面図・土層断面図を作成し、C-1区の調査を終了した（7月21日）。

C-2区では、第I・II・III層を手掘りによって除去を行った（6月10～29日）。第IV層が検出され、古代の遺物のみ出土する状況となった（7月5日）。調査トレントの西半分を掘り下げることとし、サブトレント状に第IV層を除去した（7月8日）。第V-1層を検出し、上面で崩壊瓦を発見し、平面図を作成した（7月25日）。その後、第V-1層を掘り下げたが、第V-1層中でさらに崩壊瓦が多量に発見されたため、平面図を作成し、取り上げた（7月26～28日）。第V-1層を掘り下げると、第V-2層面が検出され、SI2623を発見し、精査を行い掘り下げた（7月29日～8月1日）。SI2623のカマドを残した形で、さらに第V-2層を掘り下げ、多量の崩壊瓦層が検出され、図化した後に点取りで取り上げた（8月1～5日）。さらに下層の第VI層除去後、SF2624と第VII層を検出した（8月8日）。精査の

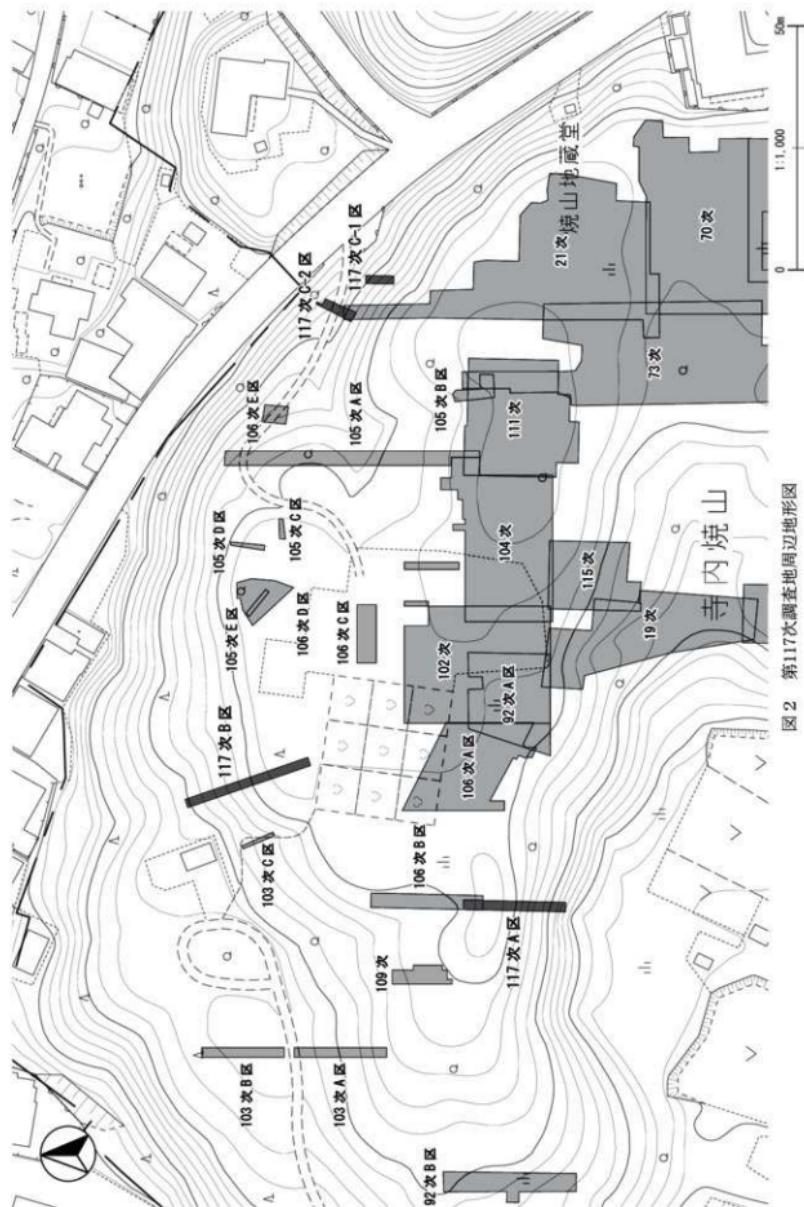


図2 第117次調査地周辺地形図

結果、SF2624は旧国道の切り通しにより大部分が削平を受けていることがわかった。また、第VII層でSF2624に伴う小ビット群を検出した。記録後、SF2624および第VII層の掘り下げを行った（8月17日）。SF2624および第VII-2層の下層からSI2625が発見され、記録化した（8月19～22日）。第IX層地山飛砂層を確認し、最終的な写真撮影・平面図・土層断面図を作成した（8月23日）。

A～C区の埋め戻しを重機で行い（8月25日）、機材等を撤収し調査を終了した（8月30日）。

なお、8月4日に令和高校三年生1名のインターンシップ、8月5日に岩見三内中学校三年生2名の職場体験の受け入れを行い、発掘調査を体験してもらった。また、令和4年7月23日に第117次調査の現地説明会を開催し、44名の参加があった。7月7日に文化庁文化財第二課近江俊秀主任調査官から指導を受けた。12月23日に多賀城跡調査研究所において高橋栄一所長より指導を受けた。

2 A区検出遺構と出土遺物

A区からは土器埋設遺構1基、木材堀跡1条、溝跡1条、切岸状遺構1基、ビット1基が検出された（図3・4）。このうち、土器埋設遺構1基（SX2599）は古代の遺構と考えられ、それ以外は中世遺構であると考えられる。

①古代の遺構

S X2599土器埋設遺構（図3、図版3）

調査区中央部の第IV層面で検出された土器埋設遺構である。平面形は直径40cmの円形の掘り込みで、深さ20cmで赤褐色土器甕が埋設されている。掘り込みの下部10cmの埋土は炭が詰まっている。

S X2599土器埋設遺構出土遺物（図5、図版8・15）

赤褐色土器（図5-1）：1（10-961）は小型甕である。土器内部から骨片が出土した（図版15-10）。体部外面に縱方向のヘラケズリ。口縁部の内外面に煤状炭化物が付着している。底部切り離しはナデ調整によって不明である。

②中世の遺構

S A2600木材堀跡（図3、図版3）

調査区北側の第IV層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅25～35cm、深さ30cm、長さ2m以上で、断面はU字状を呈し、直径12cmの円形の柱痕跡が伴う。西で4°北に振れる。溝内に間隔をあけて木材を立て並べた構造の柱列堀と考えられる。

SD2601と重複し、これより古い。

S D2601溝跡（図3、図版3）

調査区北側の第IV層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。幅1.5m、深さ20cm、長さ2m以上で、断面は皿状を呈する。西で2°北に振れる。

SA2600と重複し、これより新しい。

S D2601溝跡出土遺物（図5、図版8）

中世陶器（図5-2）：2（10-962）は埋土から出土した珠洲系中世陶器の插鉢である。内面に10条一単位の深く粗い鉤し目が認められる。

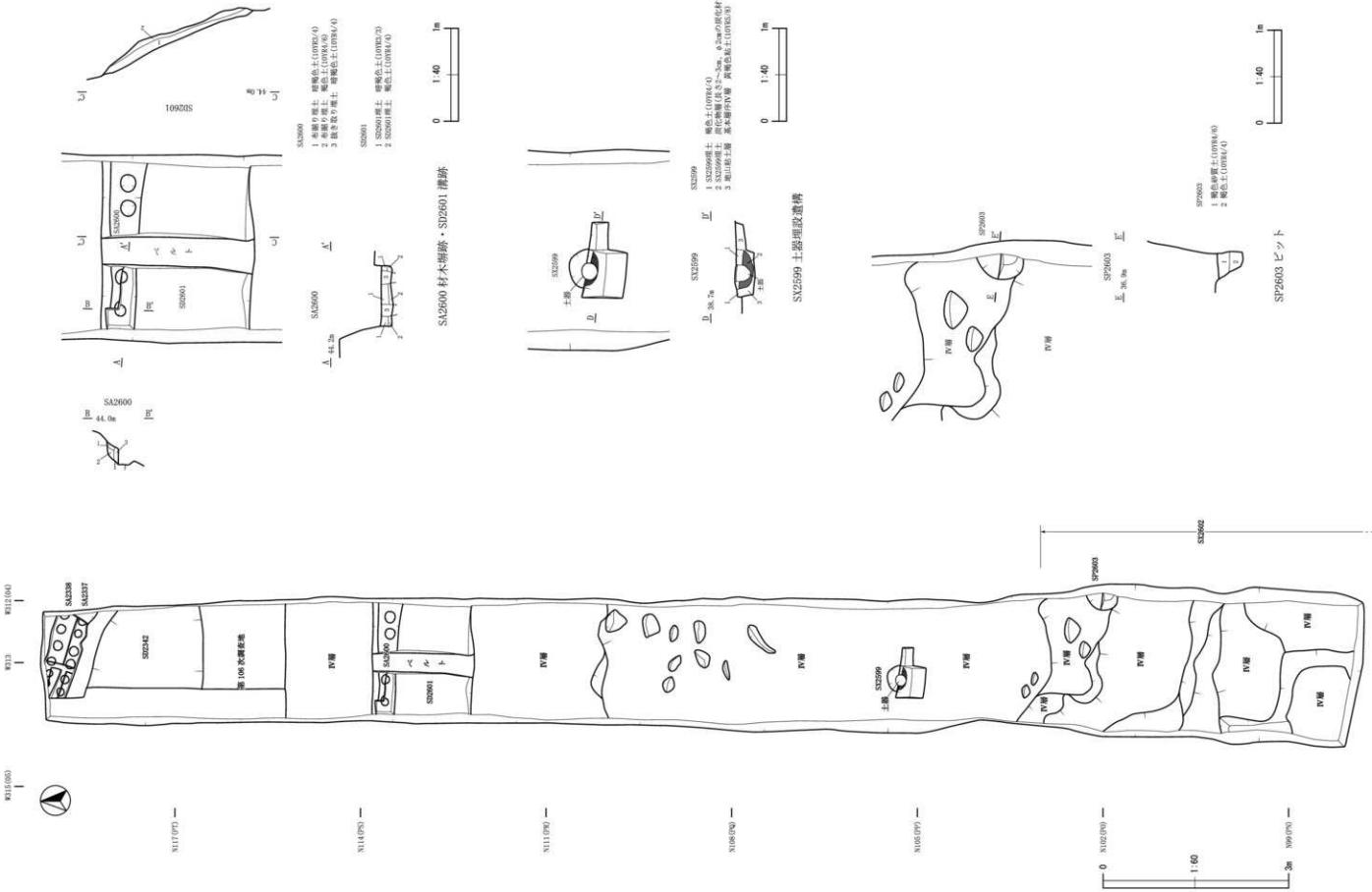


図3 第117次調査地A区検出遺構全体図

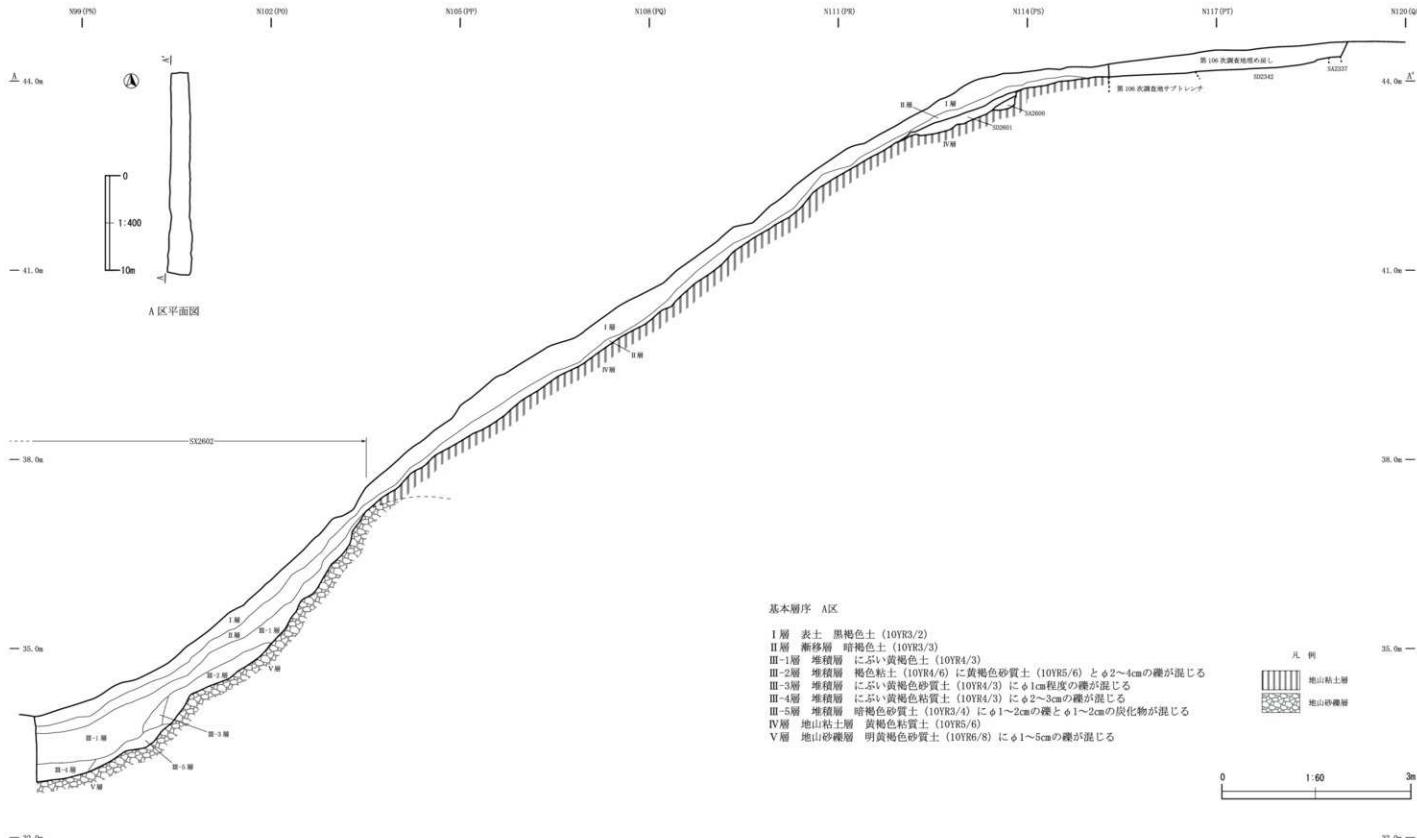


図4 第117次調査地A区西壁土層断面図

S X2602切岸状遺構（図3・4、図版4）

調査区南端約5mの範囲に第IV層を削平し急斜面を形成している。形成された斜面は約40°となる。

S P2603ピット（図3）

調査区南側の第V層面で検出されたピットである。平面形は直径50cmの円形を呈し、深さ25cmである。

3 A区基本層序および各層出土遺物

A区の現地形は北から南に傾斜している斜面である。A区の基本層序をまとめると下記のようになる。

第I層 表土：黒褐色土（10YR3/2）。

第II層 漸移層：暗褐色土（10YR3/3）。

第III層 堆積層：調査区南端のSX2602切岸状遺構の上部に堆積した層である。以下のように細分される。

第III-1層 堆積層：にぶい黄褐色土（10YR4/3）。

第III-2層 堆積層：褐色粘土（10YR4/6）に黄褐色砂質土（10YR5/6）とφ2～4cmの礫が混じる。

第III-3層 堆積層：にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）にφ1cm程度の礫が混じる。

第III-4層 堆積層：にぶい黄褐色粘質土（10YR4/3）にφ2～3cmの礫が混じる。

第III-5層 堆積層：暗褐色砂質土（10YR3/4）にφ1～2cmの礫とφ1～2cmの炭化物が混じる。

第IV層 地山粘土層：黄褐色粘質土（10YR5/6）。SX2599・SA2600・SD2601・SX2602が検出された。

第V層 地山砂礫層：明黄褐色砂質土（10YR6/8）にφ1～5cmの礫が混じる。SP2603が検出された。

各層出土遺物**第I層 出土遺物（図5-3～7、図版8）**

中世陶器（図5-3～6）：3（10-963）は珠洲系中世陶器の擂鉢である。片口部があり、内面に11条一單位の深く粗い卸し目が認められる。4（10-964）・5（10-965）は珠洲系中世陶器の大甕である。

5（10-965）は外面に平行叩き痕と刻印による加飾があり、内面は無文の當て具痕が認められる。6（10-966）は珠洲系中世陶器の甕で、外面は平行叩き痕、内面は無文の當て具痕が認められる。

銭貨（図5-7）：7（10-967）は寛永通寶（古寛永、初鑄1636年）である。

第II層 出土遺物（図6-1～3、図版8）

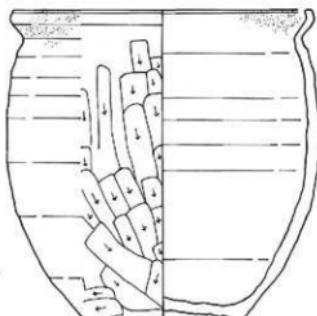
須恵器（図6-1）：1（10-968）は蓋で扁平なつまみを有している。

弥生土器（図6-2）：2（10-969）は外面に変形工字文と考えられる文様がある。

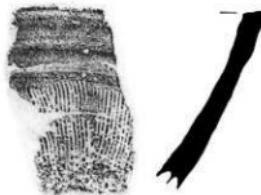
瓦（図6-3）：3（10-970）は一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目压痕が認められる。灰黄色で、焼成良好、硬質である。

第III層 出土遺物（図6-4～6、図版8）

中世陶器（図6-4～6）：いずれも第III-1層出土である。4（10-971）・5（10-972）は瀬戸美濃系中世陶器で、4（10-971）は丸皿、5（10-972）は折縁皿である。6（10-973）は珠洲系中世陶器の壺の破片である。



1(10-961)



2(10-962)



3(10-963)



4(10-964)



5(10-965)



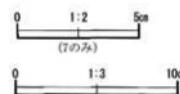
6(10-966)

1 A区SX2599 2 A区SD2601埋土 3~7 A区第I層

図5 A区出土遺物 (1)



7(10-967)
(S=1/2)



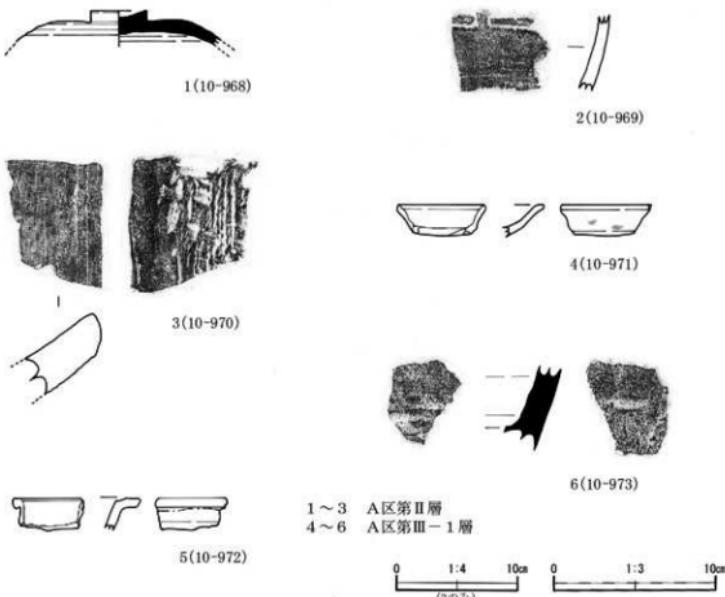


図6 A区出土遺物(2)

4 B区検出遺構と出土遺物

B区からは材木堀跡2条、溝跡2条、土壙跡2基、土坑1基、土取り穴1基、ピット9基が検出された(図7・8)。このうち、土取り穴(SG2611)は出土遺物が得られなかつたが、古代の遺構の可能性がある。これ以外は、すべて中世の遺構であると考えられる。

S A2604材木堀跡(図8、図版4)

調査区南側で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅100cm、深さ35cm、長さ2m以上で断面はU字状を呈し、直径15cmの円形の柱痕跡が伴う。西で20°南に振れる。構内に間隔をあけて材木を立て並べた構造の柱列堀と考えられる。

SX2608・SG2611と重複し、これらより新しい。

S A2604材木堀跡出土遺物(図12-1・2、図版9)

鉄製品(図12-1・2): 1 (10-974)・2 (10-975)は、いずれも抜き取り埋土出土で、釘である。

S A2605材木堀跡(図8、図版4)

調査区中央部で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅50~60cm、深さ15cm、長さ2m以上で断面はU字状を呈し、直径9cmの円形の柱痕跡が伴う。西で20°南に

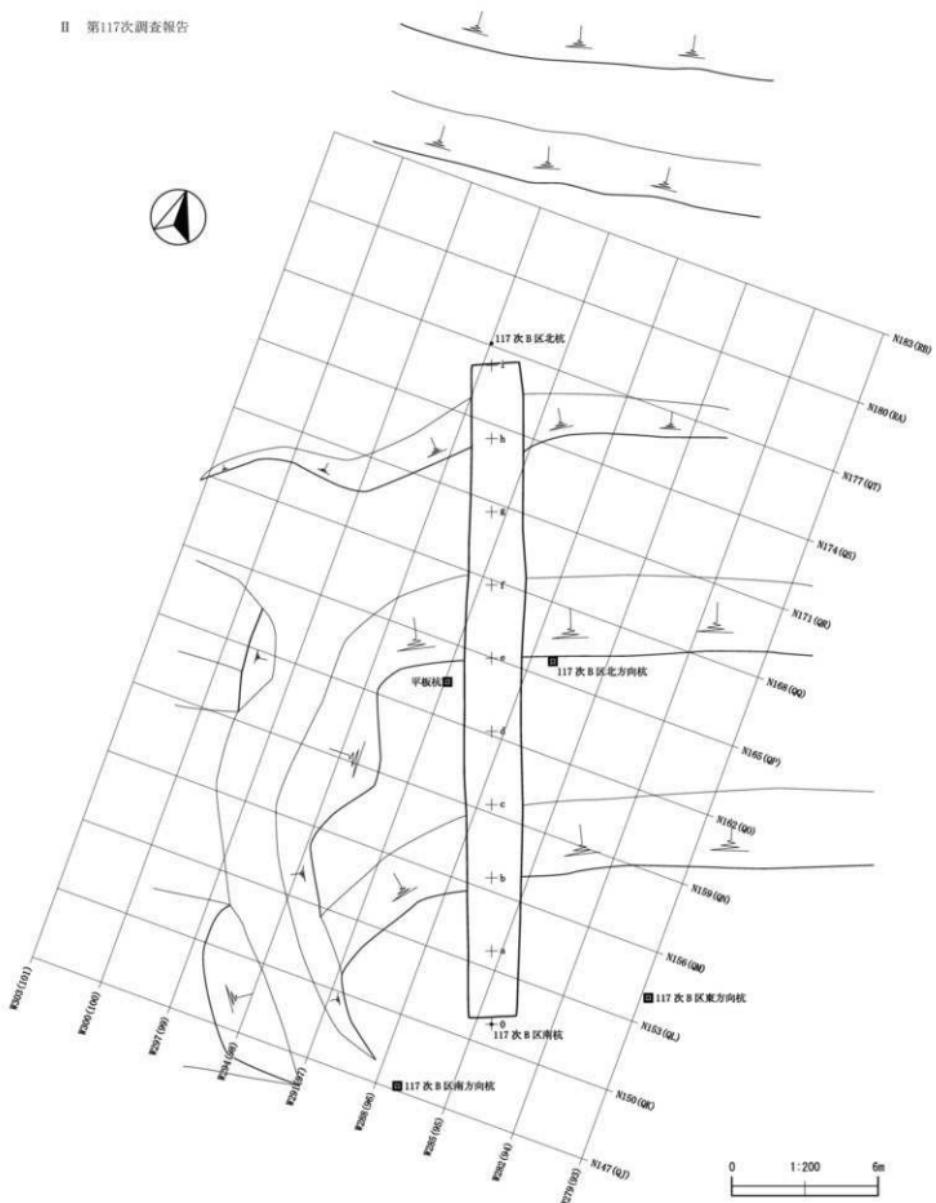


図7 第117次調査地B区周辺詳細地形図

振れる。溝内に間隔をあけて材木を立て並べた構造の柱列壠と考えられる。

SX2609と重複し、これより新しい。

S D2606溝跡（図8、図版4）

調査区北側の第III層面で検出された東西方向の区画施設である。幅2.5m、深さ45cm、長さ2m以上で、断面は幅広の半円形である。西で20°南に振れる。

SX2609と重複し、これより新しい。

S D2606溝跡出土遺物（図12-3、図版9）

銭貨（図12-3）：3（10-976）は埋土出土で、永楽通寶（明・初鑄1408年）である。銭文が明瞭で厚さも厚く、本錢の可能性が高い。

S D2607溝跡（図8・10、図版5）

調査区中央の第II-4層および第IX層面で検出された東西方向の区画施設である。幅2.4m、深さ60cm、断面は逆台形である。西で20°南に振れる。第II-1～3層の整地層によって、埋め立てられている。

S D2607溝跡出土遺物（図12-4、図版9）

土器（図12-4）：4（10-977）は弥生土器の鉢である。外面縄文原体LRを施し、内面ミガキ調整を施す。

S X2608土壘跡（図8・9、図版5）

調査区南側で検出された東西方向の区画施設である。第IX層面を基盤として構築されており、基底幅は2.5m、盛土層は3層確認され、40cm以上積み上げている。

SA2604と重複し、これより古い。

S X2609土壘跡（図8・9、図版5）

調査区中央で検出された東西方向の区画施設である。第II-3層およびVII層を基盤として構築されており、基底幅は2.7m。盛土層は3層確認され、40cm以上積み上げている。

SA2605と重複し、これより古い。

S K2610土坑（図8）

調査区中央の第II-1層面で検出された土坑である。平面形は長軸1.0m、短軸60cm、深さ20cmの梢円形である。

S G2611土取り穴（図8・11）

調査区南側の第X層面で検出された土取り穴である。平面形は不明で、深さ55cm以上、底面は凹凸があり土取り穴と判断される。

SA2604と重複し、これより古い。

S P2612ピット（図8）

調査区北側のSX2608土壌跡に伴う小ピットである。平面形は直径30cmの円形。深さ15cmである。

S P 2613ピット（図8）

調査区北側のSX2608土壌跡に伴う小ピットである。平面形は直径30cmの円形。深さ20cmである。

S P 2614ピット（図8）

調査区北側のSX2608土壌跡に伴う小ピットである。平面形は直径20cmの円形。深さ20cmである。

S P 2615ピット（図8）

調査区北側のSX2608土壌跡に伴う小ピットである。平面形は直径20cmの円形。深さ10cmである。

S P 2616ピット（図8）

調査区北側のSX2608土壌跡に伴う小ピットである。平面形は直径25cmの円形。深さ15cmである。

S P 2617ピット（図9）

調査区北側のSX2608土壌跡に伴う小ピットである。断面でのみ確認し、深さ10cmである。

S P 2618ピット（図9）

調査区北側のSX2608土壌跡に伴う小ピットである。断面でのみ確認し、深さ15cmである。

S P 2619ピット（図9）

調査区北側のSX2608土壌跡に伴う小ピットである。断面でのみ確認し、深さ30cmである。

S P 2620ピット（図9）

調査区北側のSX2608土壌跡に伴う小ピットである。断面でのみ確認し、深さ20cmである。

5 B区基本層序および各層出土遺物

B区の現地形は南から北に向けて傾斜した斜面である。B区の基本層序をまとめると以下のようになる。

第Ⅰ層 表土もしくは造成土：現表土。第Ⅰ-1層（黒褐色土（10YR2/3））、第Ⅰ-2層（暗褐色土（10YR3/4））、第Ⅰ-3層（黒褐色土（10YR2/2））がある。

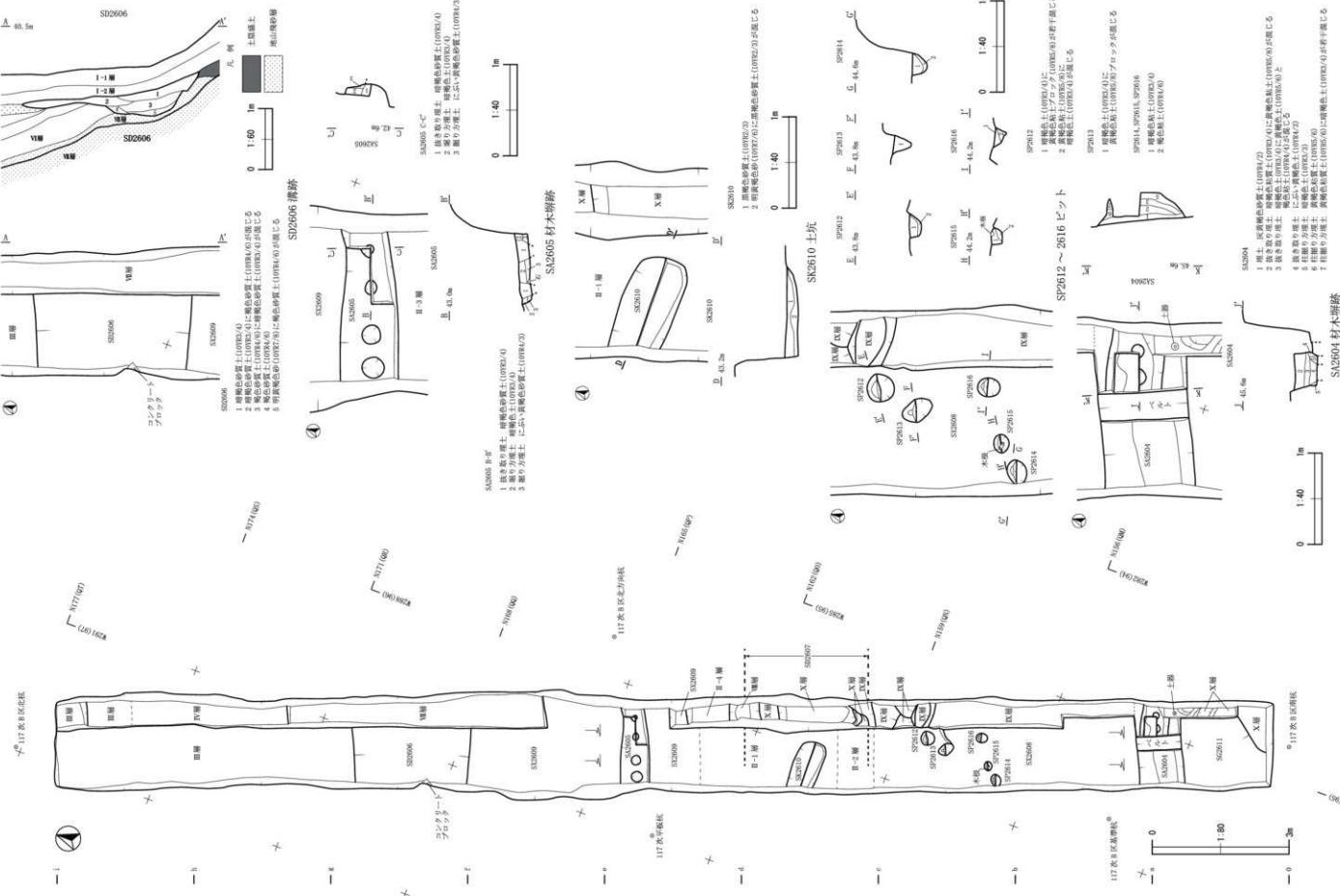
第Ⅱ層 中世整地層：中世の整地層と考えられ、以下のように細分され、第Ⅱ-1～3層が中世の後半段階の整地層、第Ⅱ-4層が前半段階の整地層である。

第Ⅱ-1層 中世整地層：褐色砂質土（10YR4/6）に明黄褐色砂（10YR7/6）が混じる。

第Ⅱ-2層 中世整地層：にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）。

第Ⅱ-3層 中世整地層：暗褐色砂質土（10YR3/3）。

第Ⅱ-4層 中世整地層：褐色砂質土（10YR4/6）。



第三章 河流生态与环境监测

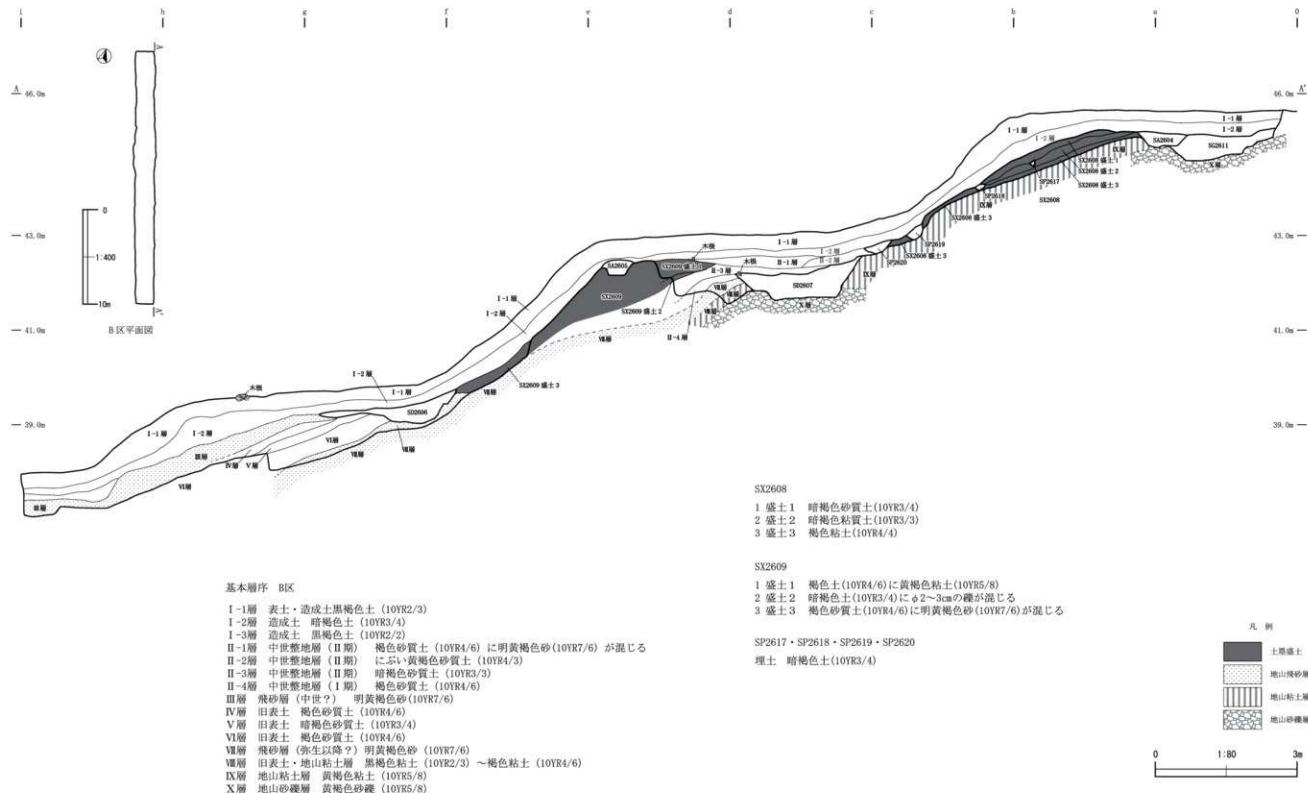


図9 第117次調査地B区東壁土層断面図

- 第Ⅲ層** 飛砂層：明黄褐色砂（10YR7/6）。
- 第Ⅳ層** 旧表土：褐色砂質土（10YR4/6）。
- 第Ⅴ層** 旧表土：暗褐色砂質土（10YR3/4）。
- 第Ⅵ層** 旧表土：褐色砂質土（10YR4/6）。
- 第Ⅶ層** 飛砂層：明黄褐色砂（10YR7/6）。
- 第Ⅷ層** 旧表土：黒褐色粘土（10YR2/3）～褐色粘土（10YR4/6）。
- 第Ⅸ層** 地山粘土層：黄褐色粘土（10YR5/8）。
- 第Ⅹ層** 地山砂礫層：黄褐色砂礫（10YR5/8）。

飛砂層は、第Ⅲ層と第Ⅶ層の2つの層で確認されている。

各層出土遺物

第Ⅰ層 出土遺物（図12-5～9、図版9）

5～8（10-978～981）は第I-1層出土、9（10-982）は第I-3層出土である。

中世陶器（図12-5）：5（10-978）は珠洲系中世陶器の甕である。外面に平行の叩き痕、内面に無文の當て具痕が認められる。

弥生土器（図12-6～8）：6（10-979）は甕で、外面に横走沈線と列点文が認められる。7（10-980）は甕で、外面頸部に横走沈線、口縁部に横方向の刷毛目調整、内面にミガキ調整が認められる。8（10-981）は壺で、横走沈線と構成不明の文様が描かれる。

磁器（図12-9）：9（10-982）は磁器碗である。外面に草花を染め付けている。

第Ⅱ層 出土遺物（図12-10・11、図版9）

10（10-983）は第II-1層、11（10-984）は第II-3層出土である。

磁器（図12-10）：10（10-983）は中国産の染付皿である。

土器（図12-11）：11（10-984）は弥生土器の甕もしくは壺の底部破片である。外面に縄文原体LRの縄文を施している。

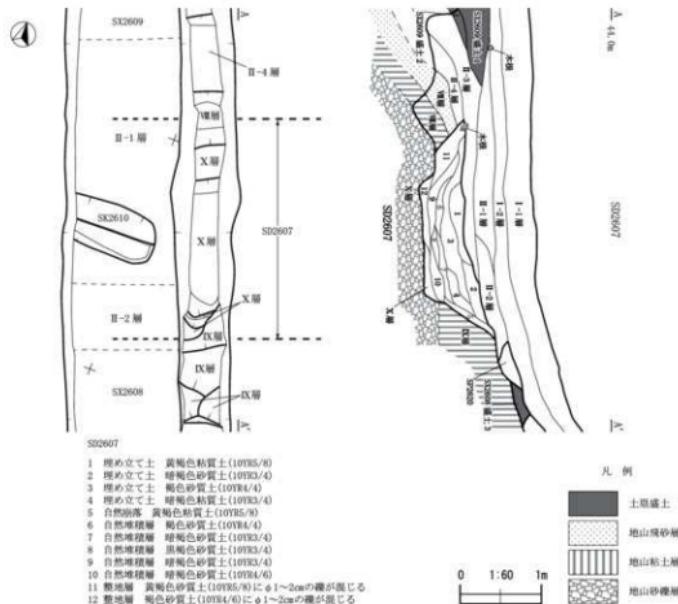
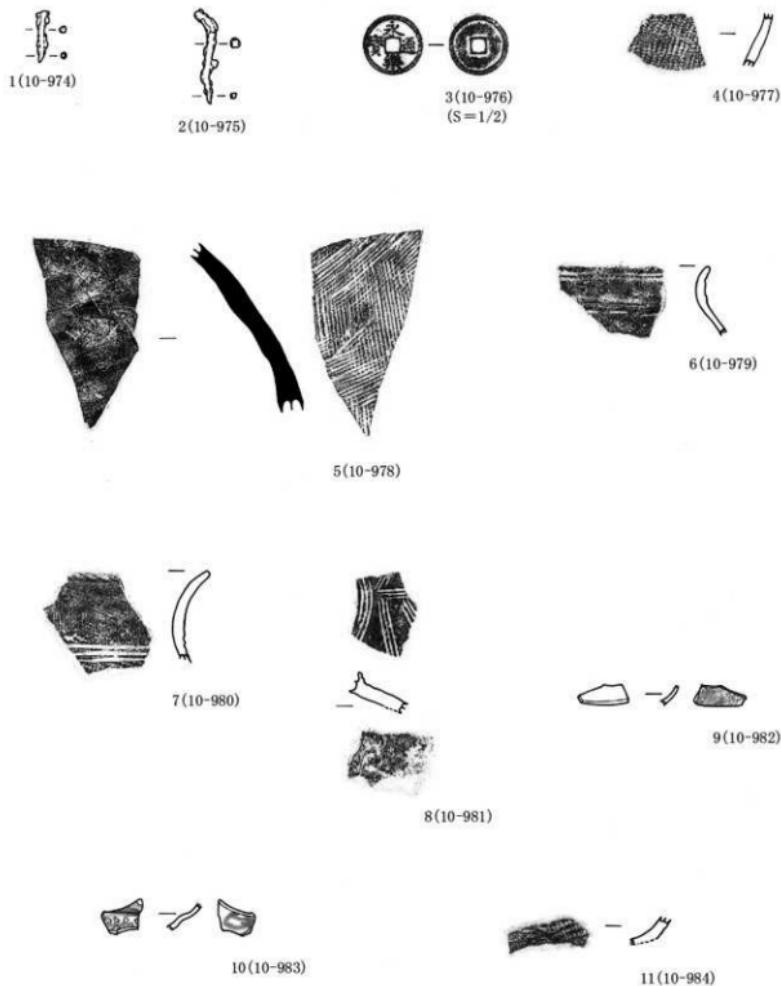


図10 SD2607溝跡



図11 SG2611土取り穴



- | | | | |
|-------|----------------|----|------------|
| 1 ~ 2 | B区SA2604抜き取り埋土 | 9 | B区第I - 3層 |
| 3 | B区SD2606埋土 | 10 | B区第II - 1層 |
| 4 | B区SD2607埋土 | 11 | B区第II - 3層 |
| 5 ~ 8 | B区第I - 1層 | | |

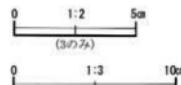


図12 B区出土遺物

6 C-1区検出遺構

C区は地形に合わせて2本の調査トレーナーを設定した(図13)。C-1区からはピット1基が検出された(図14)。

S P 2621ピット(図14)

調査区南側の第III層で検出されたピットである。平面形は直径50cmの隅丸方形を呈する。

7 C-1区基本層序および各層出土遺物

C-1区の現地形は南から北に向けて傾斜した斜面である。C-1区の基本層序をまとめると以下のようになる。

第I層 表土：黒褐色砂(10YR3/2)。

第II層 整地層カ：褐色砂(10YR4/6)。

第III層 旧表土：暗褐色砂質土(10YR3/4)。

第IV層 地山飛砂層：明黄褐色砂(10YR7/6)。

第II層は古代整地層の可能性が高い。

各層出土遺物

第I層 出土遺物(図15-1、図版9)

須恵器(図15-1)：1(10-985)は台付坏である。底部回転ヘラ切り後、台部を貼り付けている。

第II層 出土遺物(図15-2、図版9)

瓦(図15-2)：2は(10-986)丸瓦で、凸面にナデ調整、凹面に布目压痕が認められる。橙色で、焼成や不良、やや軟質である。

第III層 出土遺物(図15-3・4、図版9)

須恵器(図15-3)：3(10-987)は坏の口縁部破片である。

赤褐色土器(図15-4)：4(10-988)は壺の胴部下半の破片である。外面平行叩き痕が認められる。

8 C-2区検出遺構と出土遺物

C-2区では築地跡1基、竪穴建物跡2棟、ピット2基が検出された(図16・17)。遺構は、第IV層面、第V-2層面、第VII-1層、第VIII層、第IX層面で検出されている。すべて古代の遺構であると考えられる。以下、遺構が検出された各層ごとに遺構・遺物の記述を行う。

①第IV層面検出遺構

S P 2622ピット(図18-①)

調査区中央部の第IV層面で検出されたピットである。平面形は直径30cmの円形で、深さ15cmである。

②第V-2層面検出遺構と出土遺物

S I 2623竪穴建物跡(図18-③・19-④・20、図版6)

調査区南側の第V-2層面で検出された竪穴建物跡である。一边4.5cm以上で深さ20cmである。カマドの焚き口は東側を向いている。カマドの支脚として、図24-3(10-997)の埠が用いられていた。建物の壁は西で10°北に振れる。

S I 2623堅穴建物跡出土遺物（図23・24、図版10）

図23-1～4（10-989～992）・図24-1・3（10-995・997）はカマドの埋土出土であり、図23-6（10-994）は床面出土、それ以外は埋土出土である。

須恵器（図23-1～4）：図23-1～4（10-989～992）は壊である。1（10-989）は底部切り離し不明で丁寧なナデ調整を施す。2・3（10-990・991）は底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。4（10-992）は台付杯で底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整を施し、台部を貼り付けている。

土師器（図23-5・6、図24-1）：いずれも甕である。図23-5（10-993）は平底の小型甕で、外側は口縁部横方向のナデ調整、体部は縦方向の刷毛目調整、内面は横方向の刷毛目調整を施す。底部はナデ調整を施しており、著しい砂粒や木葉痕などは認められない。図23-6（10-994）は大型甕の口縁部破片である。内外面に横方向の刷毛目調整が認められる。図24-1（10-995）は大型甕の底部破片である。内外面に縦方向の刷毛目調整が認められる。

灰釉陶器（図24-2）：2（10-996）は瓶の肩部の破片である。

土製品（図24-3）：3（10-997）は埠で、立位で出土し、カマドの支脚として利用されていた。

瓦（図24-4）：4（10-998）は一枚づくりの平瓦で、凸面に繩目叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。灰色で、焼成良好で堅緻、硬質である。凸面に砂粒が目立ち、凹面に糸切りが残っており、糸切り方向は上から下である。

③第VII-1層面検出遺構と出土遺物**S F 2624築地堀跡**（図19-⑤・21、図版2・7）

調査区北側で第VII-1層を構築面として確認された北西-南東方向の築地堀跡の一部である。積土は平面で幅20～30cmを確認した。大走り部分を含めると幅2.0mを測る。積土は断面で2段が確認された。西で20°北に振れる。

S F 2624築地堀跡出土遺物（図25-1・2、図版11）

土師器（図25-1）：1（10-999）は積土中から出土した。甕の底部破片である。体部外面に縦方向の刷毛目調整、底部に木葉痕が認められる。

瓦（図25-2）：2（11-000）は積土中から出土した。丸瓦である。凸面に丁寧なナデ調整、凹面に布目圧痕が認められる。灰色で、焼成良好、軟質である。凹面に糸切り痕が残っており、糸切り方向は右上から左下である。

④第VIII層面検出遺構と出土遺物**S I 2625堅穴建物跡**（図19-⑥・22、図版7）

調査区北側の第VIII層面で検出された堅穴建物跡である。一辺2.7m以上、深さ30cmである。カマドの焚き口は北を向いている。

S I 2625堅穴建物跡出土遺物（図25-3～7、図版11）

図25-3～5（11-001～003）は埋土出土、図25-6・7（11-004・005）は床面出土である。

須恵器（図25-3～5）：3・4（11-001・002）は壊である。3（11-001）は底部回転ヘラ切り後、体部下端から底部にかけてケズリ調整を施している。4（11-002）は底部回転ヘラ切り後、丁寧なナデ調整を施す。5（11-003）は短頸壺である。

土師器（図25-6）：6（11-004）は小型甕で、内外面に刷毛目調整を施す。7（11-005）は大型甕で、内外面に刷毛目調整を施し、外面は縦方向、内面は横方向である。

⑤第IX層面検出遺構

SP2626ピット（図19-⑥）

調査区北側の第IX層面で検出されたピットである。平面形は直径25cmの円形である。

9 C-2区基本層序および各層出土遺物

C-2区の現地形は調査区北端が急傾斜地となる地点である。C-2区の基本層序をまとめると以下のようになる。

第I層 表土：現表土。第I-1層（暗褐色土（10YR3/4）、第I-2層（暗褐色土（10YR3/4））がある。第I-1層は北側へいくほど厚く堆積している。

第II層 造成土：第II-1層（褐色土（10YR4/4）、第II-2層（褐色土（10YR4/4）にφ2～3cmの礫が混じる）、第II-3層（にぶい黄褐色土（10YR5/3）にφ2～3cmの礫が混じる）がある。調査区南側に堆積している。

第III層 造成土：暗褐色土（10YR3/4）にφ5～10cmの礫が混じる。

第IV層 築地崩壊土：赤褐色粘質土（5YR4/6）。古代の整地層であり、SF2628築地崩跡由来の粘土を含んでいると考えられる。SP2622ピットが検出されている。

第V層 崩壊瓦層：SF2628築地崩跡に葺かれていたと考えられる瓦が多量に分布している層である。以下の2つに細分される。

第V-1層 崩壊瓦層上層：暗褐色土（10YR3/4）に瓦が混じる。

第V-2層 崩壊瓦層下層：暗褐色土（10YR3/3）に瓦が多く混じる。SI2623堅穴建物跡が検出されている。

第VI層 古代整地層：暗褐色砂質土（10YR3/3）。SF2624南側に堆積している。

第VII層 古代整地層：築地崩構築面のための整地層で、以下の2つに細分される。

第VII-1層 築地崩大走り部分整地層：黄褐色粘土（10YR5/8）。SF2624築地崩跡の構築面である。

第VII-2層 古代整地層：暗褐色砂質土（10YR3/3）ににぶい黄褐色土（10YR4/3）が混じる。

第VIII層 古代整地層：褐色土（10YR4/4）。SI2625堅穴建物跡が検出されている。

第IX層 地山飛砂層：明黄褐色砂（10YR7/6）。SP2626ピットが検出されている。

各層出土遺物

第I層 出土遺物（図25-8・9、図版11）

中世陶器（図25-8）：8（11-006）は珠洲系中世陶器の壺R種である。頸部に刷毛目による装飾を施す。

磁器（図25-9）：9（11-007）は肥前系磁器の碗で、高台部に二本の圈線を染め付けている。

第III層 出土遺物（図25-10～12・図26-1～3、図版11・12）

須恵器（図25-10～12）：10（11-008）・11（11-009）は壺である。10（11-008）は底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整を施している。11（11-009）は底部回転糸切り無調整である。12（11-010）は蓋で、天井

部ケズリ調整を施しており、内面は摩滅しており硯に転用している。

赤褐色土器（図26-1）：1（11-011）は長胴甕の口縁部破片である。

石器（図26-2）：2（11-012）珪質頁岩製の石鏃である。

瓦（図26-3）：3（11-013）は一枚作りの平瓦で、凸面に繩目叩き後ナデ調整、凹面に布目圧痕が認められる。灰色、焼成堅緻、硬質である。縁辺を意図的に打ち欠いている。

第IV層 出土遺物（図26-4～14・図27-1～3、図版12・13）

須恵器（図26-4～9）：4～7（11-014～017）は壺である。いずれも底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整を施す。8・9（11-018・019）は、台付壺である。いずれも底部回転ヘラ切り後、丁寧なナデ調整後台部を貼り付けている。8（11-018）は高台部が内端接地である。

土師器（図26-10・11）：10・11（11-020・021）は、いずれも甕で外面には縦方向、内面には横方向の刷毛目調整を施している。

赤褐色土器（図26-12～14）：12・13（11-022・023）は壺である。12（11-022）は内外面丁寧なナデ調整を施している。13（11-023）は底部回転糸切り無調整である。14（11-024）は長胴甕の破片で、外外面にカキ目調整を施している。

瓦（図27-1～3）：1（11-025）は一枚作りの平瓦で、凸面に繩目叩き後ナデ調整、凹面に布目圧痕が認められる。黄灰色で、焼成やや不良、軟質である。2・3（11-026・027）は丸瓦で凸面にナデ調整、凹面に布目圧痕が認められる。いずれも焼成やや不良で軟質であるが、2（11-026）は橙色、3（11-027）は黄灰色である。

第V-1層 出土遺物（図27-4～9・図28-1～5・図29-1～4、図版13・14）

須恵器（図27-4）：4（11-028）は壺の底部破片であると考えられる。

土師器（図27-5～8）：5～7（11-029～031）は甕で、頸部に沈線状の段が認められる。8（11-032）は壺で、外面に縦方向、内面に横方向の刷毛目調整が認められる。

瓦（図27-9・図28-1～5・図29-1～4）：図27-9・図28-1～3（11-033～036）はV-1層上面出土である。図27-9・図28-1・2（11-033～035）は平瓦で、いずれも一枚作りで、凸面に繩目叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。図27-9（11-033）は黒色でいぶし焼成、焼成はやや不良で軟質で、摩滅している。図28-1（11-034）は橙色で、焼成やや不良、軟質である。図28-2（11-035）は灰色で、焼成やや不良、軟質である。図28-3（11-036）は丸瓦で、凸面に繩目圧痕の後にナデ調整を施し、凹面に布目圧痕が認められる。灰色で焼成やや不良で軟質である。図28-4～5・図29-1～4（11-037～042）はV-1層の出土である。図28-4（11-037）は一枚作りの平瓦で、凸面に繩目の叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。灰色で焼成良好、やや硬質で、凸面は砂粒が多い。図28-5・図29-1～4（11-038～042）は丸瓦で、いずれも凸面にナデ調整、凹面に布目圧痕が認められ、軟質である。図28-5・図29-1・4（11-038・039・042）は橙色、図29-2・3（11-040・041）は灰色である。図28-5・図29-1（11-038・039）は焼成やや不良で、図29-2～4（11-040～042）は焼成良好である。

第V－2層 出土遺物（図29－5・6、図30－1～6、図版14・15）

土師器（図29－5・6）：5・6（11-043・044）はいずれも甕の破片である。5（11-043）は口縁部破片で、頸部に沈線状の段が2条ある。6（11-044）は底部破片で、切り離しは不明でナデ調整がみられる。

瓦（図30－1～6）：1～3（11-045～047）は一枚作りの平瓦である。いずれも凸面に繩目の叩き痕、凹面に布目压痕が認められ、灰色で軟質である。1（11-045）は焼成やや不良、2・3（11-046・047）は焼成良好である。1（11-045）の凸面に繩目の叩き後にナデ調整が行われている。2（11-046）は胎土に白色粒を含み、3（11-047）は胎土がやや褐色で砂粒が多い。4～6（11-048～050）は丸瓦である。いずれも凸面にナデ調整、凹面に布目压痕が認められる。4（11-048）と6（11-050）は灰色、5（11-049）は黒色のいぶし焼成である。いずれも焼成は良好で、軟質である。

第VI層 出土遺物（図31－1、図版15）

土師器（図31－1）：1（11-051）は甕の口縁部破片で、外面頸部に沈線状の段が1条あり、内面は横方向の刷毛目調整が認められる。

第VII－1層 出土遺物（図31－2・3、図版15）

瓦（図31－2・3）：2・3（11-052・053）はいずれもVII－1層上面出土の丸瓦で、凸面に繩目の叩き痕後ナデ調整を施し、凹面に布目压痕が認められ、灰色で焼成良好、軟質である。

第VII－2層 出土遺物（図31－4～6、図版15）

土師器（図31－4～6）：いずれも甕で、4・5（11-054・055）は口縁部破片、6（11-056）は砂底風の底部破片である。

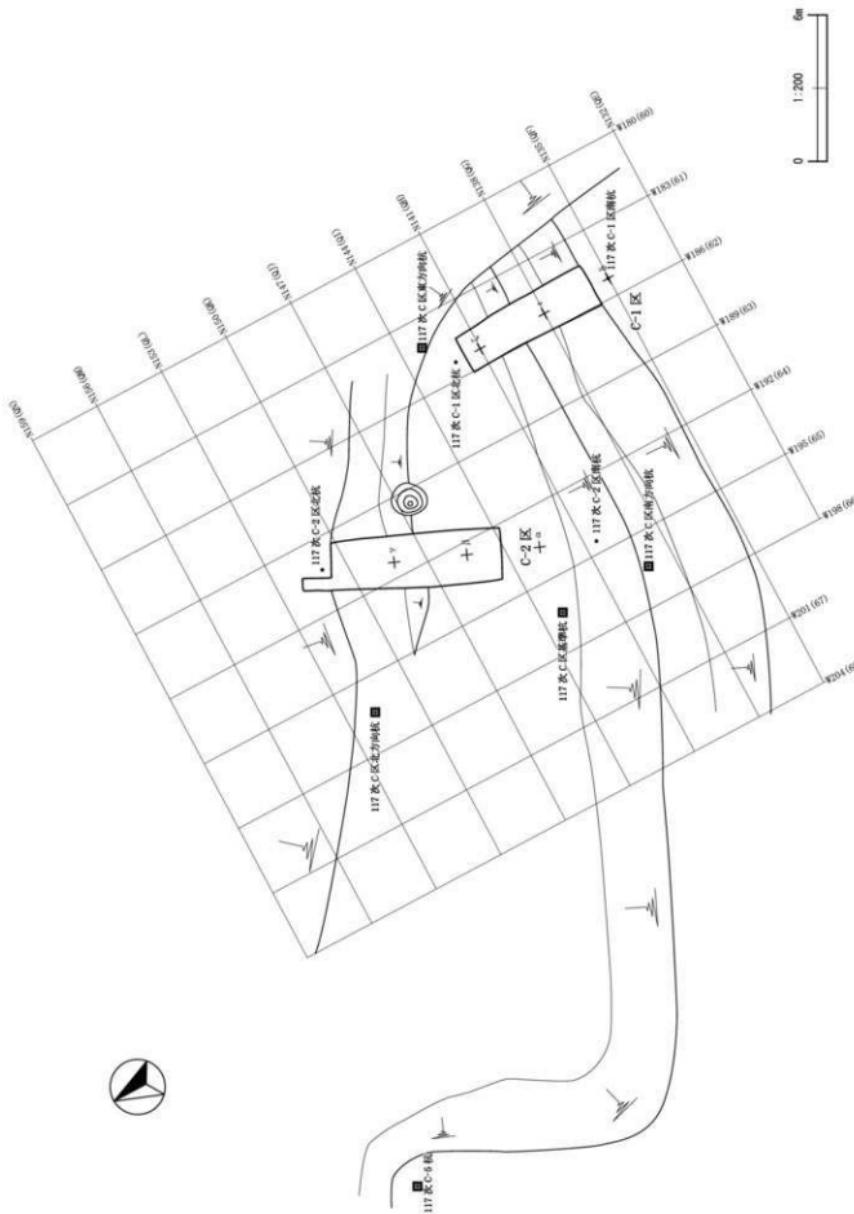


圖13 第112次調查地C區周邊詳細地形圖

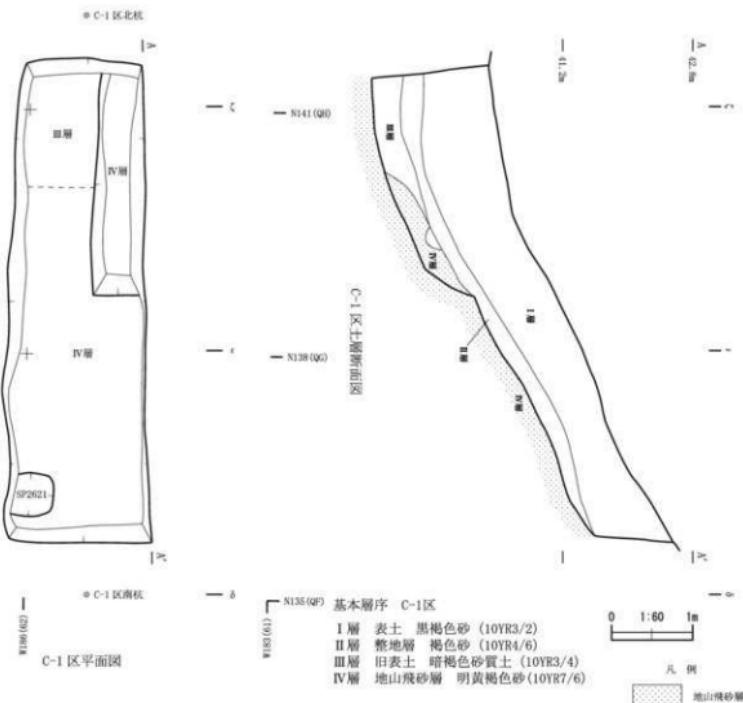


図14 第117次調査地C-1区検出遺構全体図・土層断面図

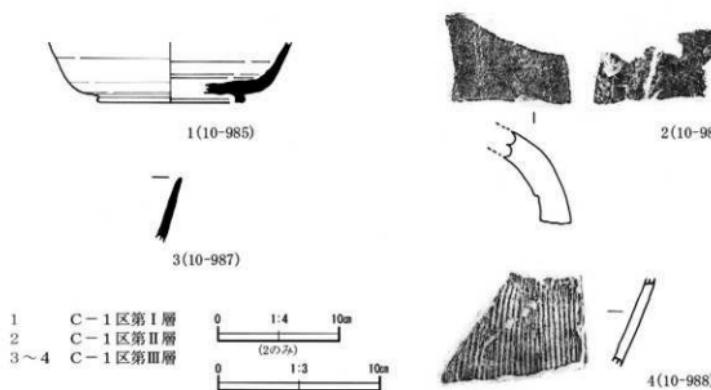


図15 C-1区出土遺物

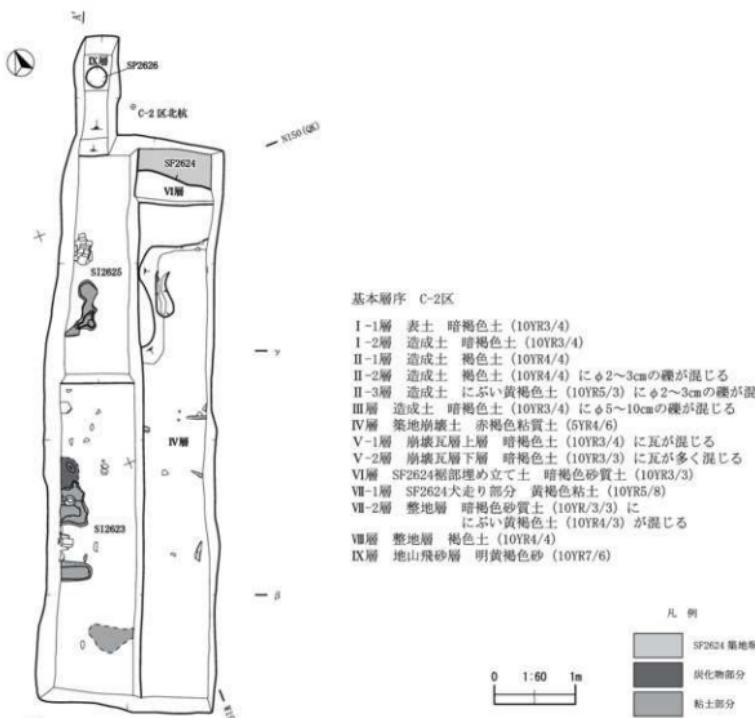


図16 第117次調査地C-2区検出遺構全体図（調査終了状況）

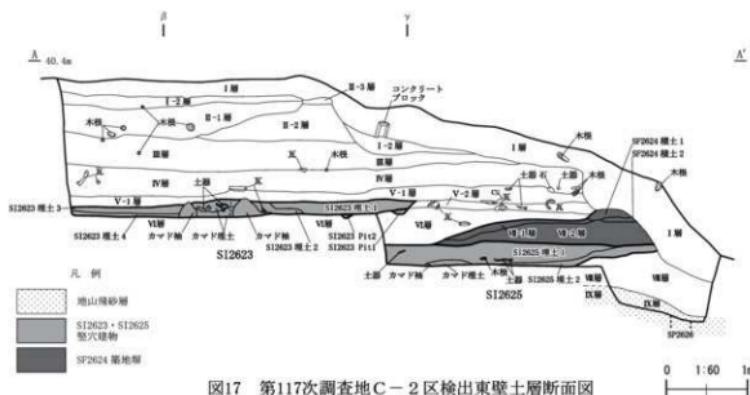
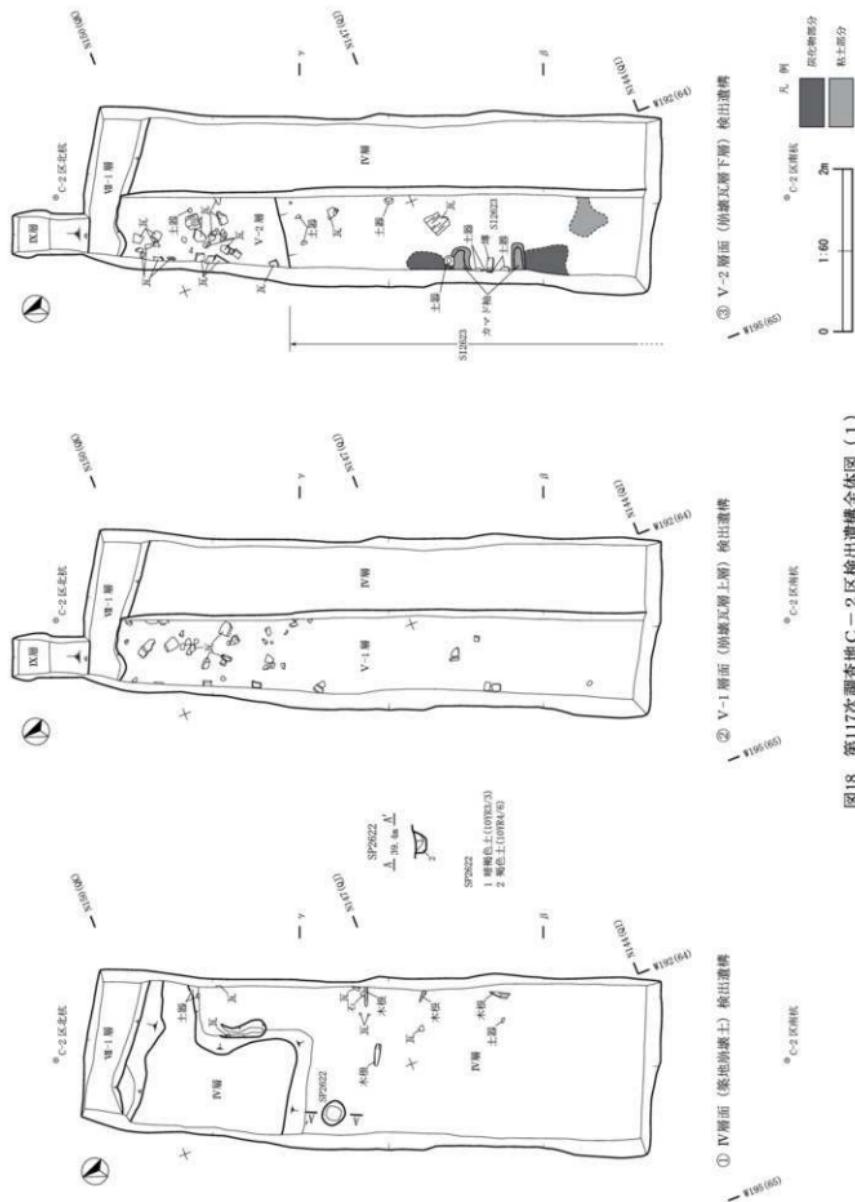


図17 第117次調査地C-2区検出東壁土層断面図



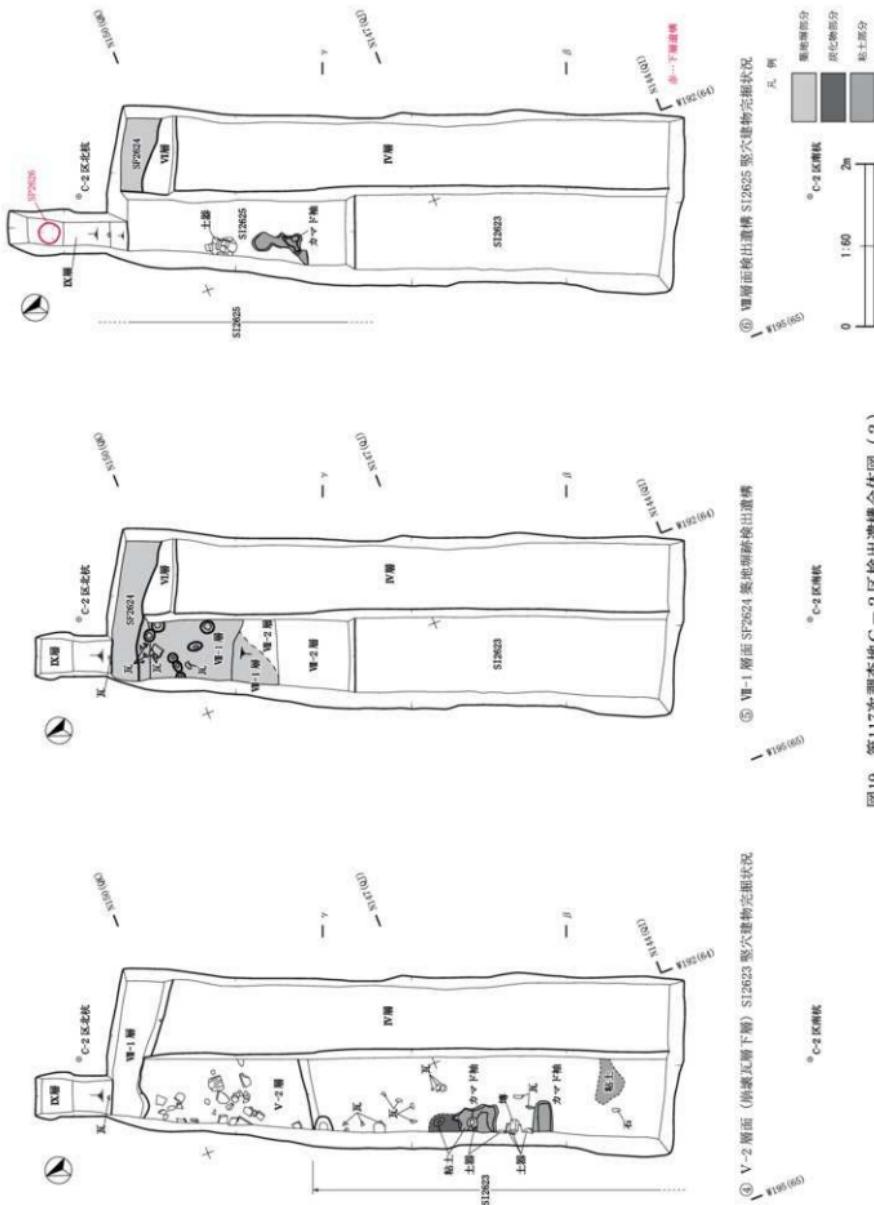


图19 第117次調查地C-2区検出遺構全体図 (2)



図20 SI2623壁穴建物跡

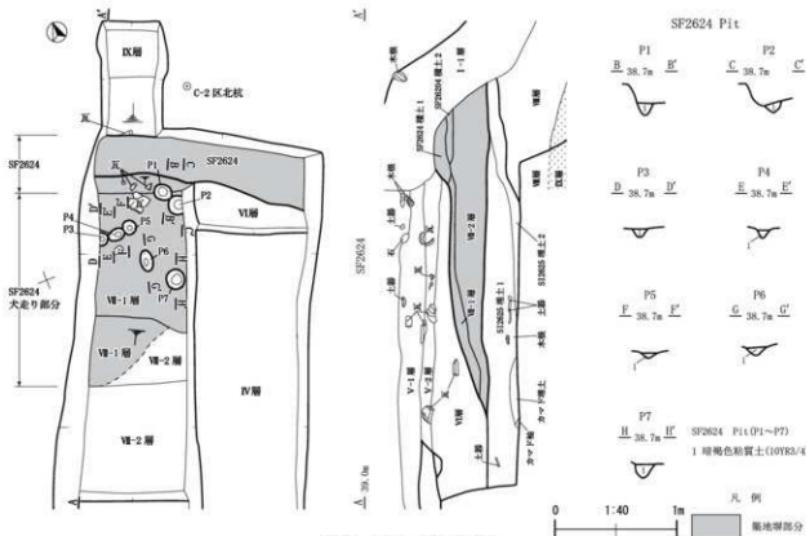


図21 SF2624坑

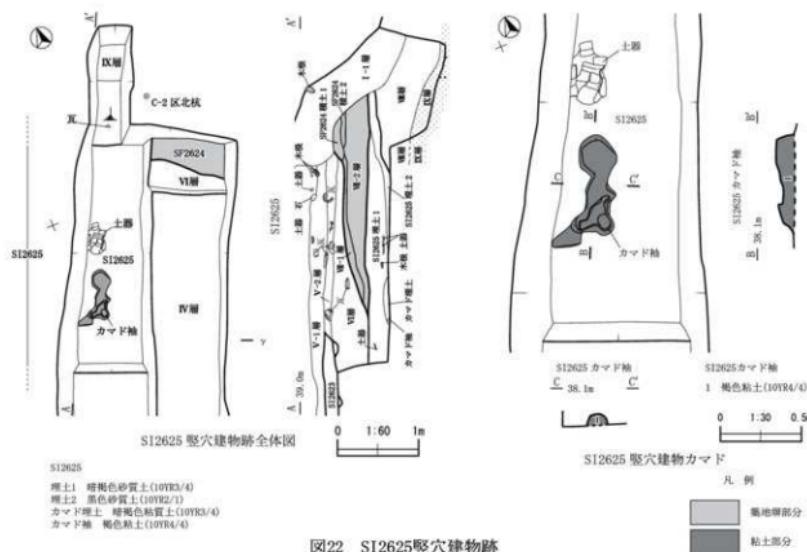


図22 SI2625堅穴建物跡

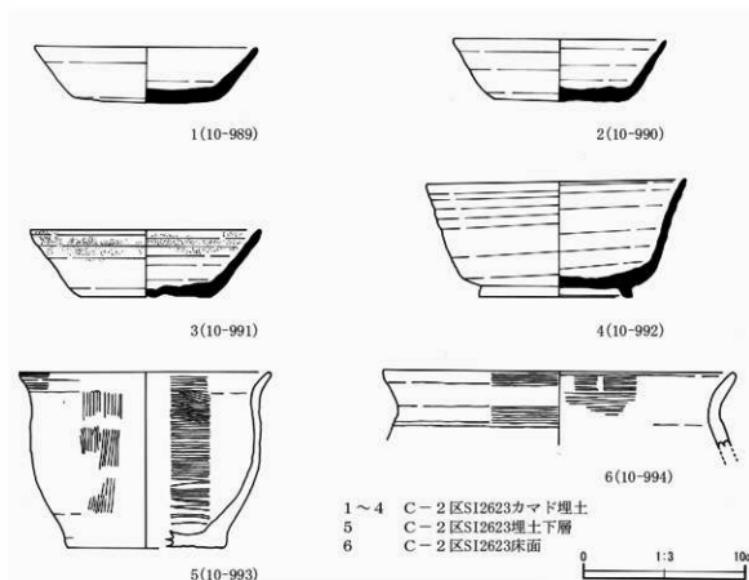


図23 C-2区遺構内出土遺物（1）

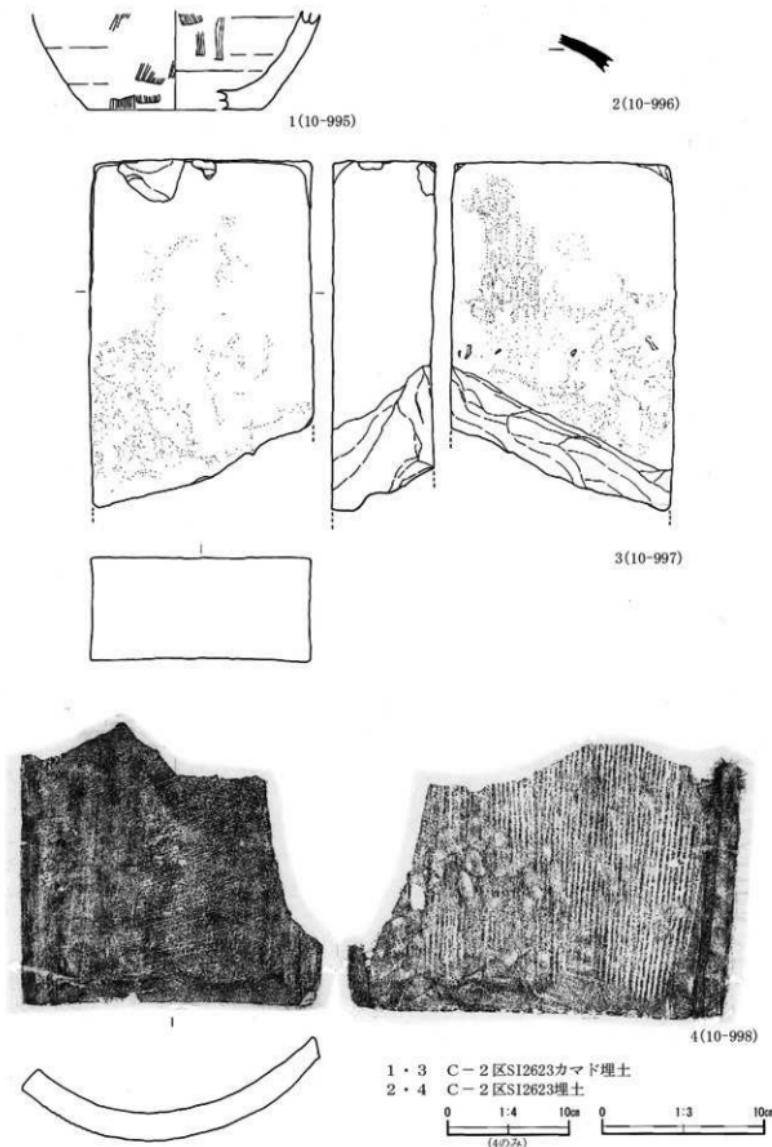


図24 C-2区遺構内出土遺物（2）

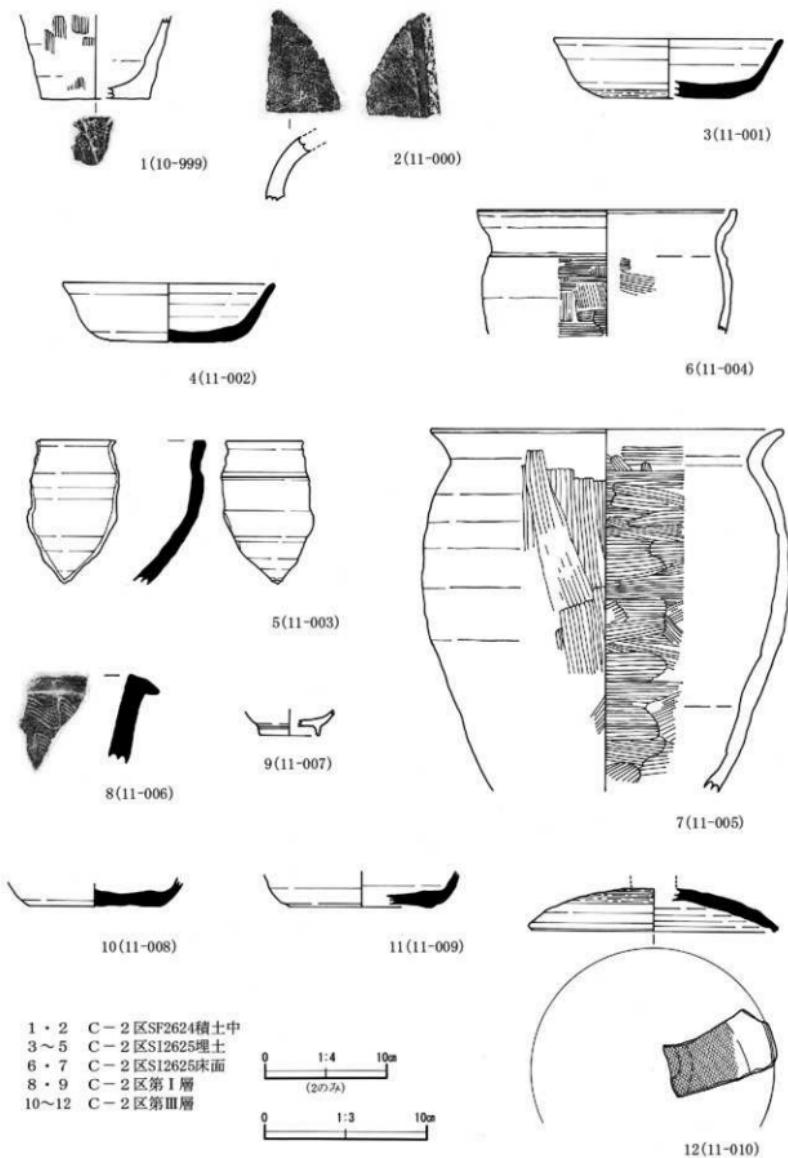


図25 C-2区遺構内出土遺物(3)・遺構外出土遺物(1)

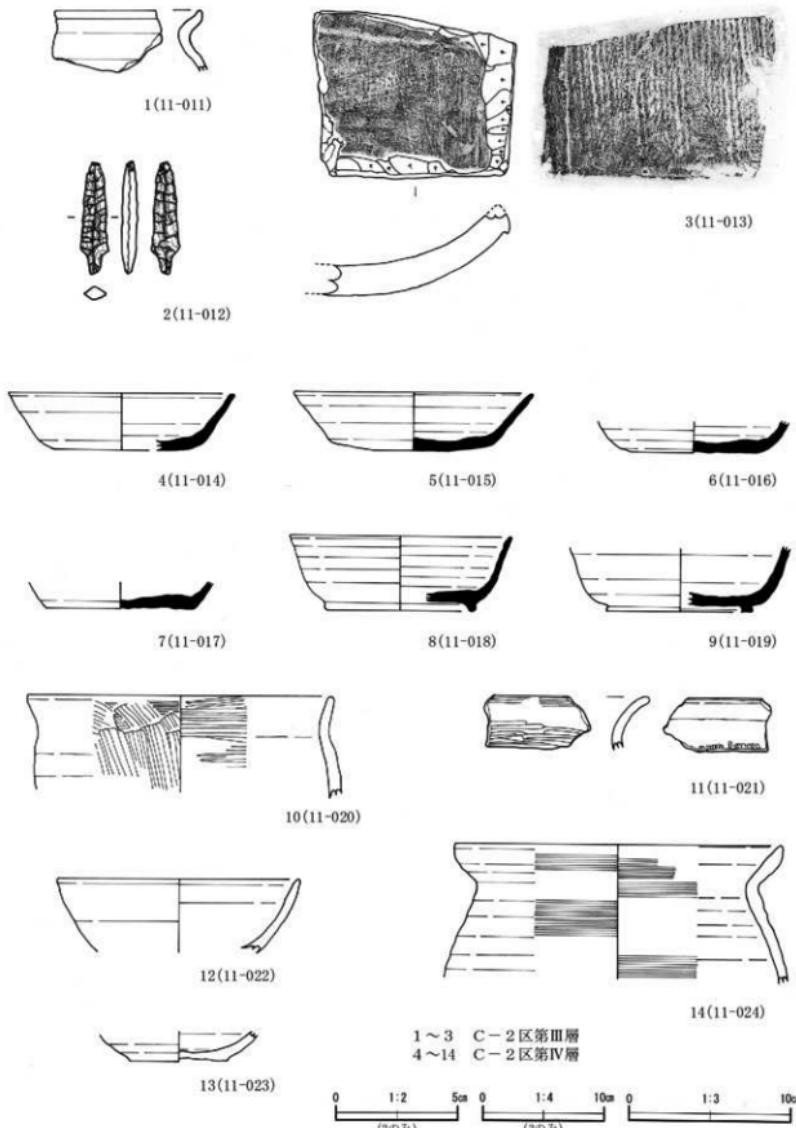


図26 C-2区遺構外出土遺物（2）

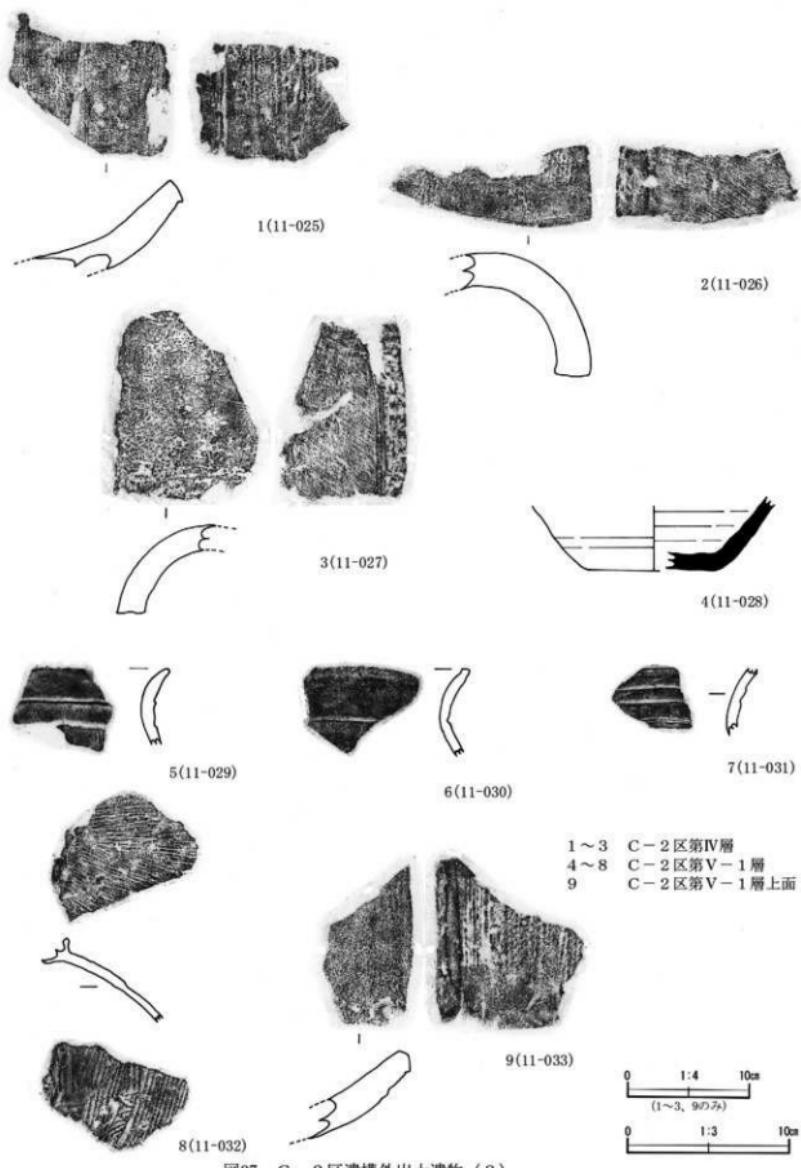


図27 C-2区遺構外出土遺物（3）

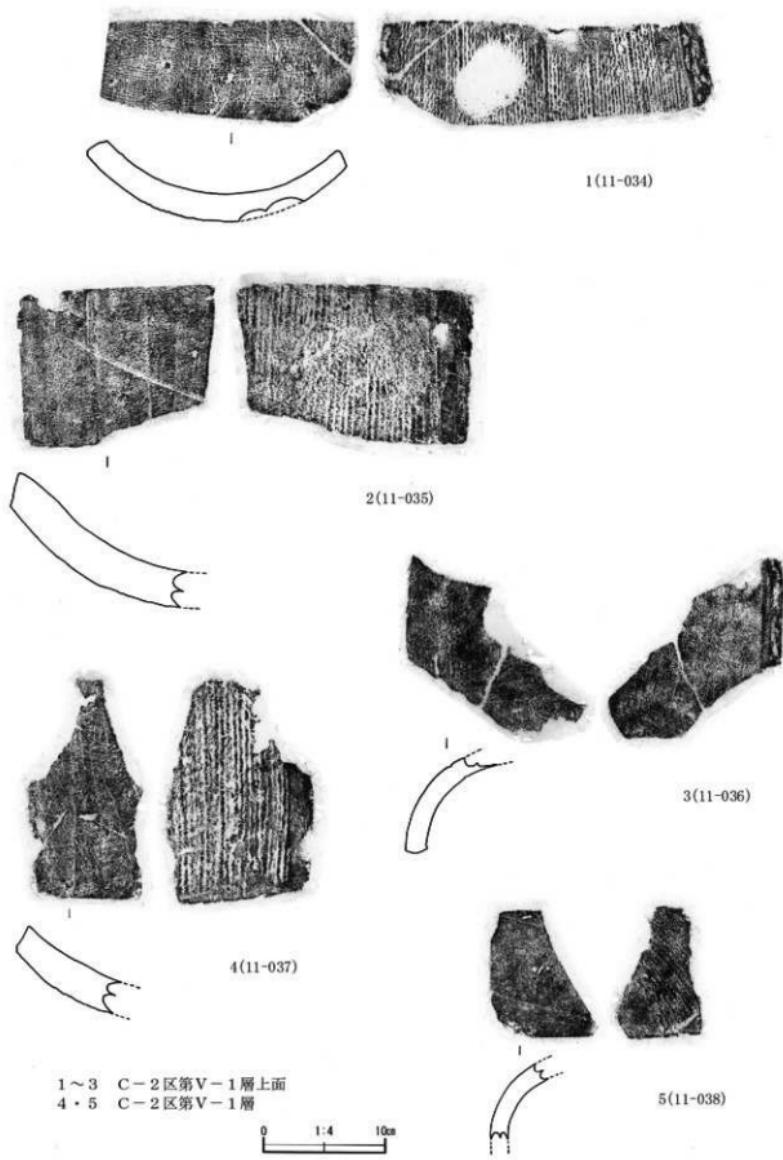
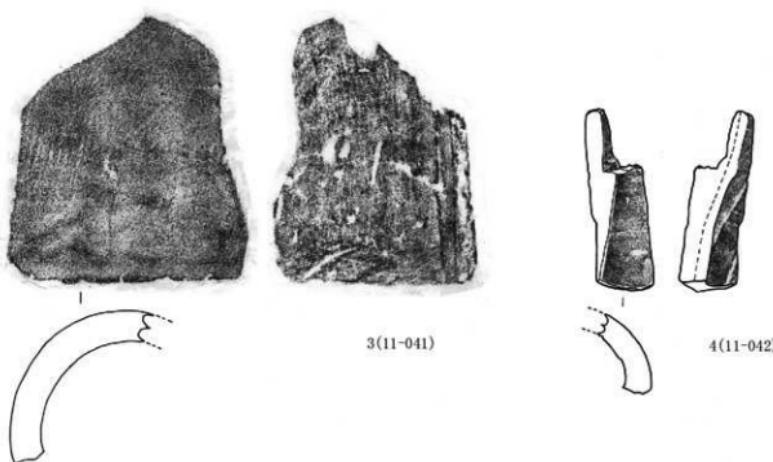
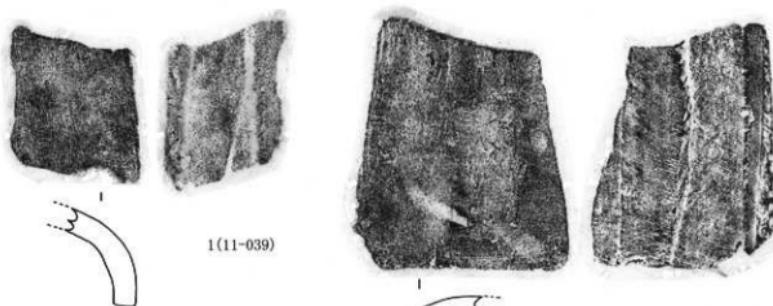


図28 C-2区遺構外出土遺物 (4)



1~4 C-2区第V-1層
5・6 C-2区第V-2層

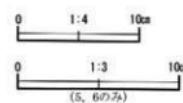
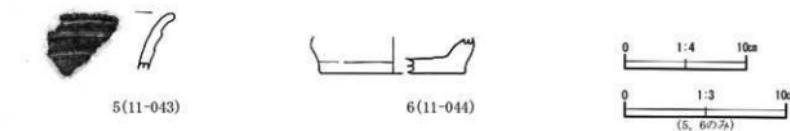


図29 C-2区遺構外出土遺物 (5)

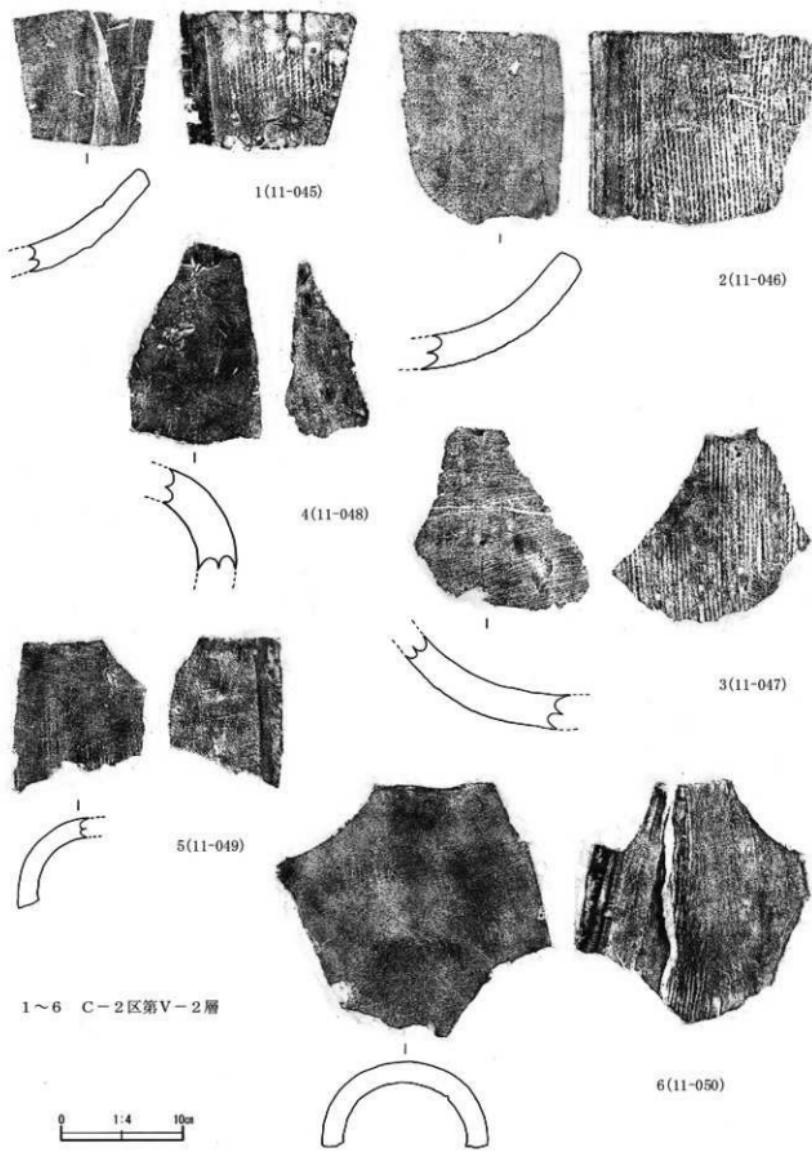
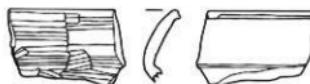
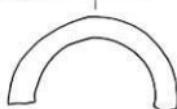
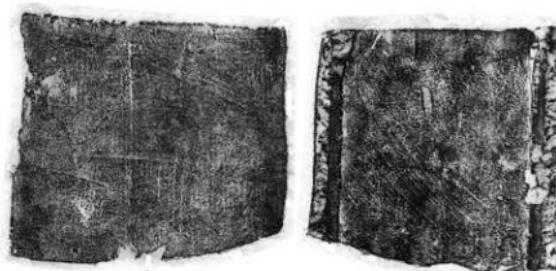


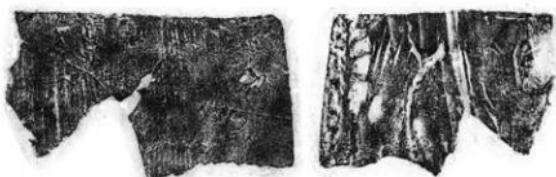
図30 C-2区遺構外出土遺物（6）



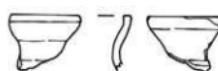
1(11-051)



2(11-052)



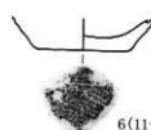
3(11-053)



4(11-054)



5(11-055)



6(11-056)

1 C-2区第VI層
2・3 C-2区第VII-1層
4~6 C-2区第VII-2層

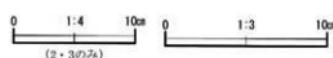


図31 C-2区遺構外出土遺物（7）

表3 第117次調査地検出遺構一覧

遺構No.	図番号	検出面	時期	重複遺構 新旧関係	備 考	現場 No.
SX2599	図3	IV層	古代		直径40cmの円形の掘り込み。深さ20cm。赤褐色土器焼が埋設されている。下部10cmの埋土は炭が詰まっている。	SX01
SA2600	図3	IV層	中世	→SD2601	幅25~35cm、深さ30cm、長さ2m以上。断面U字状。東西方向、直径12cmの円形の柱痕跡。西で4° 北に振れる。	SA01
SD2601	図3	IV層	中世	SA2600→	幅1.5m、深さ20cm、長さ2m以上。断面皿状。東西方向、西で2° 北に振れる。	SD01
SX2602	図3	IV層	中世		AI8南端約5mの範囲にIV層を削平し急斜面を形成している。形成された斜面は約40°。	切岸状 遺構
SP2603	図3	V層	中世		直径50cmの円形。深さ25cm。	Pit02

B区

遺構No.	図番号	検出面	時期	重複遺構 新旧関係	備 考	現場 No.
SA2604	図8		中世	SX2608・SG2611→	幅100cm、深さ35cm、長さ2m以上。断面U字状。東西方向。直径15cmの円形の柱痕跡。西で20° 南に振れる。	SA02
SA2605	図8		中世	SX2609→	幅50~60cm、深さ15cm、長さ2m以上。断面U字状。東西方向。直径9cmの円形の柱痕跡。西で20° 南に振れる。	SA04
SD2606	図8	III層	中世	SX2609→	幅2.5m、深さ45cm、長さ2m以上。断面幅広の半円形。東西方向。西で20° 南に振れる。	SD02
SD2607	図8・10	II-4・IX 層	中世		幅2.4m、深さ60cm。断面逆台形。東西方向。西で20° 南に振れる。	SD03
SX2608	図8	IX層	中世	→SA2604	基底幅は2.5m、盛土層は40cm以上。	SX02
SX2609	図8	II-3・VII 層	中世	→SA2605	基底幅は2.7m、盛土層は40cm以上。	SX03
SK2610	図8	II-1層	中世		長軸1.0m、短軸60cm、深さ20cmの椭円形。長軸方向は東西方向に一致する。	SK01
SG2611	図8・11	X層	古代?	→SA2604	平面形は不明。深さ55cm。底面は凸凹がある。	SG01
SP2612	図8		中世	SX2608→	直径30cmの円形。深さ15cm。	Pit05
SP2613	図8		中世	SX2608→	直径30cmの円形。深さ20cm。	Pit04
SP2614	図8		中世	SX2608→	直径20cmの円形。深さ20cm。	Pit07
SP2615	図8		中世	SX2608→	直径20cmの円形。深さ16cm。	Pit08
SP2616	図8		中世	SX2608→	直径25cmの円形。深さ15cm。	Pit09
SP2617	図8		中世	SX2608→	土層断面でのみ確認。深さ10cm。	Pit12
SP2618	図8		中世	SX2608→	土層断面でのみ確認。深さ15cm。	Pit13
SP2619	図8		中世	SX2608→	土層断面でのみ確認。深さ30cm。	Pit15
SP2620	図8		中世	SX2608→	土層断面でのみ確認。深さ20cm。	Pit14

C-1区

遺構No.	図番号	検出面	時期	重複遺構 新旧関係	備 考	現場 No.
SP2621	図14	IV層			直径50cmの隅丸方形。	Pit11

C-2区

遺構No.	図番号	検出面	時期	重複遺構 新旧関係	備 考	現場 No.
SP2622	図18	IV層	古代		直径30cmの円形。深さ15cm。	Pit10
S12623	図20	V-2層	古代		1辺4.5cm以上。深さ20cm。カマドの焚き口は東側に向く。建物の壁は西で10° 北に振れる。	S101
SF2624	図21	VII-1層	古代		積土は幅20~30cm確認。大走り部分を含めると幅2.0m、北西~南東方向。長さ2m以上。西で20° 北に振れる。	SF01
S12625	図22	VII層	古代		1辺2.7m以上。深さ30cm。カマドの焚き口は北に向いている。	S102
SP2626	図16・19	IX層	古代		直径25cmの円形。	Pit15

【凡例】 SA0000→ 当該遺構がSA0000より新しい。
 →SA0000 当該遺構がSA0000より古い。

表4 第117次調査地出土遺物属性表(1)

A区

遺物No.	図番号	写真 図版	出土地点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-961	図5-1	図版8-1	A区SX2599	-	赤褐色土器	甕	18.4	10.0	19.0	土器埋設遺構。小型甕。内部から骨片出土。体部外面に縱方向へのラケツリ。口縁部の内外面に煤状炭化物付着。底部切り離しはナデ調整によって不明。
10-962	図5-2	図版8-2	A区SD2601 埋土	-	中世陶器	擂鉢	-	-	-	珠洲系中世陶器。内面に10条一単位の深く粗い御し目が認められる。IV期。
10-963	図5-3	図版8-3	A区 I 層	P004	中世陶器	擂鉢	-	-	-	珠洲系中世陶器。片口部。内面に11条一単位の深く粗い御し目が認められる。IV期。
10-964	図5-4	図版8-4	A区 I 层	-	中世陶器	大甕	-	-	-	珠洲系中世陶器。
10-965	図5-5	図版8-5	A区 I 层	-	中世陶器	大甕	-	-	-	珠洲系中世陶器。外表面は平行叩き痕と刻印による加飾がある。内面は無文の当て具痕。IV期。
10-966	図5-6	図版8-6	A区 I 层	P004	中世陶器	甕	-	-	-	珠洲系中世陶器。外表面は平行叩き痕。内面は無文の当て具痕。
10-967	図5-7	図版8-7	A区 I 层	PQ04	鉢	鉢	-	-	-	寛永通寶。古寛永、初鋤1636年。外縁外径25mm、内郭内径5.3mm、外径厚1.5mm、重量2.5g
10-968	図6-1	図版8-8	A区 II 层	PP04	須恵器	盞	-	-	-	扁平なつまみ。
10-969	図6-2	図版8-9	A区 II 层	PM04	弥生土器	鉢	-	-	-	外面上に変形工字文か。
10-970	図6-3	図版8-10	A区 II 层	PM04	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は繩目叩き痕、凹面は布目压痕。灰黄色。焼成良好。硬質。
10-971	図6-4	図版8-11	A区 III-1層	P004	中世陶器	丸皿	-	-	-	漬戸美濃系中世陶器。大窓期。
10-972	図6-5	図版8-12	A区 III-1層	PM04	中世陶器	折鉢皿	-	-	-	漬戸美濃系中世陶器。大窓期。
10-973	図6-6	図版8-13	A区 III-1層	P004	中世陶器	壺	-	-	-	珠洲系中世陶器。

B区

遺物No.	図番号	写真 図版	出土地点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-974	図12-1	図版9-1	B区SA2604 抜き取り埋土	-	鉄製品	釘	-	-	-	長さ31.7mm、幅8.2mm、厚さ6.4mm
10-975	図12-2	図版9-2	B区SA2604 抜き取り埋土	-	鉄製品	釘	-	-	-	長さ57.6mm、幅12.3mm、厚さ6.3mm
10-976	図12-3	図版9-3	B区SD2606 埋土	-	鉢	鉢	-	-	-	永楽通寶。明・初鋤1408年。外縁外径14mm、内郭内径5.5mm、外径厚1.0mm、重量3.4g
10-977	図12-4	図版9-4	B区SD2607 埋土	-	弥生土器	鉢	-	-	-	外面上に繩文原体LRを施す。内面ミガキ調整。
10-978	図12-5	図版9-5	B区 I -1層	h	中世陶器	甕	-	-	-	珠洲系中世陶器。外表面平行叩き痕。内面無文の当て具痕。
10-979	図12-6	図版9-6	B区 I -1層	a	弥生土器	甕	-	-	-	外面上に横走沈線と列点文。横長根A古段階～新段階。中期前業～中葉。
10-980	図12-7	図版9-7	B区 I -1層	b	弥生土器	甕	-	-	-	外面上部に横走沈線、口縁部に横方向の刷毛目調整。内面ミガキ調整。横長根A古段階～新段階。中期前業～中葉。
10-981	図12-8	図版9-8	B区 I -1層	a	弥生土器	盞	-	-	-	外面上に横走沈線と沈線による文様。中期前半カ。
10-982	図12-9	図版9-9	B区 I -3層	h	磁器	碗	-	-	-	外面上に染付。
10-983	図12-10	図版9-10	B区 II -1層	b	磁器	皿	-	-	-	中国産。染付鳳F群。
10-984	図12-11	図版9-11	B区 II -3層	d	弥生土器	壺か甕	-	-	-	外面上に繩文原体LRを施す。

C-1区

遺物No.	図番号	写真 図版	出土地点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-985	図15-1	図版9-12	C-1区 I 层	e	須恵器	台付壺	-	8.8	3.7	底部削軸ヘラ切り後台部を貼り付け。
10-986	図15-2	図版9-13	C-1区 II 层	δ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面はナデ調整、凹面は布目压痕、橙色。焼成やや不良。やや軟質。
10-987	図15-3	図版9-14	C-1区 III 层	e	須恵器	壺	-	-	-	長胴壺の胴部下半。外表面平行叩き痕。
10-988	図15-4	図版9-15	C-1区 III 层	e	赤褐色土器	甕	-	-	-	

表5 第117次調査地出土遺物属性表（2）

C-2区

遺物No.	図番号	写真 図版	出土地点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-989	図23-1	国版10-1	C-2区SI2623 カマド埋土	-	須恵器	环	13.8	9.0	3.4	底部切り離し不明、丁寧なナデ調整。
10-990	図23-2	国版10-2	C-2区SI2623 カマド埋土	-	須恵器	环	13.1	8.0	3.2	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整。点取りNo. 104
10-991	図23-3	国版10-3	C-2区SI2623 カマド埋土	-	須恵器	环	14.2	8.0	4.1	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整。点取りNo. 67
10-992	図23-4	国版10-4	C-2区SI2623 カマド埋土	-	須恵器	台付环	16.1	9.4	7.3	底部回転ヘラ切り、軽いナデ調整後、台部貼り付け。点取りNo. 70・105・106・107
10-993	図23-5	国版10-5	C-2区SI2623 埋土下層	-	土師器	甕	15.6	9.6	10.3	平底小型甕。外面は口縁部横方向のナデ調整、体部は縱方向の刷毛目調整。内面横方向の刷毛目調整。砂粒や木葉痕等なし。
10-994	図23-6	国版10-6	C-2区SI2623 床面	-	土師器	甕	21.8	-	-	大型の甕。口縁部破片。外面に横方向の刷毛目調整。点取りNo. 68
10-995	図24-1	国版10-7	C-2区SI2623 カマド埋土	-	土師器	甕	-	10.8	-	大型の甕。底部破片。外外面に縱方向の刷毛目調整。点取りNo. 70
10-996	図24-2	国版10-8	C-2区SI2623 埋土	-	灰釉陶器	瓶	-	-	-	
10-997	図24-3	国版10-9	C-2区SI2623 カマド埋土	-	土製品	塼	-	-	-	立位で出土し、カマドの支脚として利用。長さ21.4cm以上、幅13.7cm、厚さ6.3cm
10-998	図24-4	国版10-10	C-2区 SI2623埋土	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は縦目のきき痕、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好・堅緻・硬質。凸面に砂粒が目立つ。系切り方向は上から下。
10-999	図25-1	国版11-1	C-2区 SF2624 積土中	-	土師器	甕	-	6.6	-	体部外面に縱方向の刷毛目調整。底部に木葉痕。
11-000	図25-2	国版11-2	C-2区 SF2624 積土中	-	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面は丁寧なナデ調整、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好。軟質。系切り方向は右上から左下。
11-001	図25-3	国版11-3	C-2区 SI2625埋土	-	須恵器	环	14.2	8.0	3.6	底部回転ヘラ切り後、体部下端から底部にかけてケズリ調整。
11-002	図25-4	国版11-4	C-2区 SI2625埋土	-	須恵器	环	13.0	8.0	3.6	底部回転ヘラ切り後、丁寧なナデ調整。
11-003	図25-5	国版11-5	C-2区 SI2625埋土	-	須恵器	短頸甕	-	-	-	
11-004	図25-6	国版11-6	C-2区 SI2625床面	-	土師器	甕	16.0	-	-	小型甕。外外面刷毛目調整。
11-005	図25-7	国版11-7	C-2区 SI2625床面	-	土師器	甕	21.6	-	-	大型甕。外外面刷毛目調整。外浦は縱方向、内面は横方向。点取りNo. 113
11-006	図25-8	国版11-8	C-2区 I 層	α	中世陶器	壺	-	-	-	珠洲系中世陶器。壺R種。頸部に刷毛目による装飾を施す。
11-007	図25-9	国版11-9	C-2区 I 层	β	磁器	碗	-	3.6	-	肥前系磁器。高台部に2本の巻線を染め付ける。
11-008	図25-10	国版11-10	C-2区Ⅲ層	α	須恵器	环	-	8.2	-	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整。
11-009	図25-11	国版11-11	C-2区Ⅲ層	β	須恵器	环	-	8.8	-	底部回転系切り、無調整。
11-010	図25-12	国版11-12	C-2区Ⅲ層	β	須恵器	蓋	15.0	-	-	天井部ケズリ調整。内面摩滅しており、転用窓。
11-011	図26-1	国版12-1	C-2区Ⅲ層	α	赤褐色土器	甕	-	-	-	長胴甕口縁部破片。
11-012	図26-2	国版12-2	C-2区Ⅲ層	β	石器	石鎚	-	-	-	珪質石器。長さ45.4mm、幅11.0mm、厚さ5.9mm、重さ2.4g。先端部衝撃剝離痕あり。
11-013	図26-3	国版12-3	C-2区Ⅲ層	α	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は縦目叩き後ナデ調整。凹面は布目压痕。灰色。焼成堅緻・硬質。緑辺を打ち欠いている。
11-014	図26-4	国版12-4	C-2区IV層	β	須恵器	环	14.0	8.0	3.4	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整。
11-015	図26-5	国版12-5	C-2区IV層	β	須恵器	环	14.8	9.8	3.6	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整。
11-016	図26-6	国版12-6	C-2区IV層	β	須恵器	环	-	7.7	-	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整。
11-017	図26-7	国版12-7	C-2区IV層	β	須恵器	环	-	9.2	-	底部回転ヘラ切り後、軽いナデ調整。

表6 第117次調査地出土遺物属性表 (3)
C-2区

遺物No.	図番号	写真 図版	出土土地 層位	グリッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
11-018	図26-8	図版12-8	C-2区IV層	β	須恵器	台付壺	13.8	9.3	4.6	底部回転ヘラ切り、丁寧なナデ調整後、台部を貼り付け。高台部内端接続。
11-019	図26-9	図版12-9	C-2区IV層	γ	須恵器	台付壺	-	9.0	-	底部回転ヘラ切り、丁寧なナデ調整後、台部を貼り付け。
11-020	図26-10	図版12-10	C-2区IV層	γ	土師器	甕	19.0	-	-	外面縦方向、内面横方向の刷毛目調整。
11-021	図26-11	図版12-11	C-2区IV層	β	土師器	甕	-	-	-	外面縦方向、内面横方向の刷毛目調整。
11-022	図26-12	図版12-12	C-2区IV層	α	赤褐色土器	环	15.0	-	-	内外面ナデ調整。
11-023	図26-13	図版12-13	C-2区IV層	β	赤褐色土器	环	-	6.0	-	底部回転系切り、無調整。 長胴甕。内外面カキ目調整を施す。
11-024	図26-14	図版12-14	C-2区IV層	γ	赤褐色土器	甕	20.1	-	-	一枚作り。凸面は彫目叩き痕後ナデ調整。凹面は布目压痕。黄灰色。焼成や不良。軟質。
11-025	図27-1	図版13-1	C-2区IV層	γ	瓦	平瓦	-	-	-	凸面はナデ調整、凹面は布目压痕。燒成や不良。軟質。
11-026	図27-2	図版13-2	C-2区IV層	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面はナデ調整、凹面は布目压痕。燒成や不良。軟質。
11-027	図27-3	図版13-3	C-2区IV層	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面はナデ調整。凹面は布目压痕。黄灰色。焼成や不良。軟質。
11-028	図27-4	図版13-4	C-2区V-1層	γ	須恵器	盃	-	8.0	-	底部切り離し不明。
11-029	図27-5	図版13-5	C-2区V-1層	γ	土師器	甕	-	-	-	頸部に沈線状の段が2条あり。
11-030	図27-6	図版13-6	C-2区V-1層	γ	土師器	甕	-	-	-	頸部に沈線状の段が1条あり。
11-031	図27-7	図版13-7	C-2区V-1層	γ	土師器	甕	-	-	-	頸部に沈線状の段が2条あり。
11-032	図27-8	図版13-8	C-2区V-1層	β	土師器	盃	-	-	-	外面に縦方向、内面に横方向の刷毛目調整。
11-033	図27-9	図版13-9	C-2区V-1層 上面	α	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は彫目叩き痕、凹面は布目压痕。黒色。(いぶし焼成)。焼成や不良。軟質。摩滅している。点取りNo.17。
11-034	図28-1	図版13-10	C-2区V-1層 上面	β	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は彫目叩き痕、凹面は布目压痕。橙色。焼成やや不良。軟質。点取りNo.16。
11-035	図28-2	図版13-11	C-2区V-1層 上面	γ	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は彫目叩き痕、凹面は布目压痕。灰色。焼成やや不良。軟質。点取りNo.6。
11-036	図28-3	図版13-12	C-2区V-1層 上面	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面は彫目压痕の後ナデ調整。凹面は布目压痕。灰色。焼成や不良。軟質。点取りNo.1・2。
11-037	図28-4	図版14-1	C-2区V-1層	γ	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は彫目の叩き痕、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好。やや硬質。凸面は砂粒が多い。点取りNo.23。
11-038	図28-5	図版14-2	C-2区V-1層	α	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面はナデ調整。凹面は布目压痕。橙色。焼成や不良。軟質。
11-039	図29-1	図版14-3	C-2区V-1層	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面は摩滅のため不明。凹面は布目压痕。橙色。焼成や不良。軟質。点取りNo.22。
11-040	図29-2	図版14-4	C-2区V-1層	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面はナデ調整、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好。軟質。糸切り方向は右上から左下。点取りNo.24。
11-041	図29-3	図版14-5	C-2区V-1層	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面はナデ調整、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好。軟質。点取りNo.37。
11-042	図29-4	図版14-6	C-2区V-1層	β	瓦	丸瓦	-	-	-	有段。凸面はナデ調整、凹面は布目压痕。橙色。焼成良好。軟質。点取りNo.48。
11-043	図29-5	図版14-7	C-2区V-2層	γ	土師器	甕	-	-	-	頸部に沈線状の段が2条あり。
11-044	図29-6	図版14-8	C-2区V-2層	γ	土師器	甕	-	9.0	-	底部ナデ調整、切り離し不明。
11-045	図30-1	図版14-9	C-2区V-2層	β	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は彫目の叩き痕、後ナデ調整、凹面は布目压痕。灰色。焼成や不良。軟質。点取りNo.110。
11-046	図30-2	図版14-10	C-2区V-2層	γ	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は彫目の叩き痕、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好。軟質。粘土に白色粒を含む。点取りNo.81。

表7 第117次調査地出土遺物属性表（4）

C-2区

遺物No.	図番号	写真 図版	出土地点 層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
11-047	図30-3	図版14-11	C-2区V-2層	γ	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面は綺目の叩き痕、凹面は布目压痕。糸切り方向左上から右下。灰色。焼成良好。軟質。胎土やや褐色で砂粒が多い。点取りNo. 82
11-048	図30-4	図版15-1	C-2区V-2層	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面はナデ調整、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好。軟質。点取りNo. 87
11-049	図30-5	図版15-2	C-2区V-2層	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面は綺目の叩き痕後ナデ調整、凹面は布目压痕。黒色（いぶし焼成）。焼成良好。軟質。点取りNo. 89
11-050	図30-6	図版15-3	C-2区V-2層	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面は綺目の叩き痕後ナデ調整、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好。軟質。
11-051	図31-1	図版15-4	C-2区VI層	γ	土師器	甕	-	-	-	外面頸部に沈線状の段が1条あり。内面横方向の刷毛目調整。
11-052	図31-2	図版15-5	C-2区VII-1層 上面	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面は綺目の叩き痕後ナデ調整、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好。軟質。点取りNo. 99
11-053	図31-3	図版15-6	C-2区VII-1層 上面	γ	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面は綺目の叩き痕後ナデ調整、凹面は布目压痕。灰色。焼成良好。軟質。点取りNo. 95
11-054	図31-4	図版15-7	C-2区VII-2層	γ	土師器	甕	-	-	-	口縁部破片。
11-055	図31-5	図版15-8	C-2区VII-2層	γ	土師器	甕	-	-	-	口縁部破片。
11-056	図31-6	図版15-9	C-2区VII-2層	γ	土師器	甕	-	6.0	-	底部砂底黒。

III 考 察

1 第117次調査について

第117次調査は焼山地区北西部を対象として、3地区に4箇所のトレンチを設定した。A・B区では中世城館としての焼山北西部について、C区は古代秋田城の外郭線についての実態把握を目的として行った。調査の結果、A区からは土器埋設遺構1基、材木堀跡1条、溝跡1条、切岸状遺構1基、ピット1基が、B区からは材木堀跡2条、溝跡2条、土塁跡2基、土坑1基、土取り穴1基、ピット9基が、C-1区からはピット1基が、C-2区からは築地堀跡1基、堅穴建物跡2棟、ピット2基が検出された。

これらの遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。遺物包含層や検出遺構の年代について各調査区で検討を行い、以下にまとめる（註1）。

（1）A区について

①A区の遺物包含層の年代について

A区の層序については、第II章3の基本層序で述べたが、各層出土の年代比定資料をみていく。第I層では珠洲系中世陶器の擂鉢、大甕などが出土しており、擂鉢（図5-3、10-963）、大甕（図5-5、10-965）はIV期のもので、13世紀末～14世紀中葉である。その他に第I層から寛永通寶（図5-7、10-967）も出土している。第II層からは9世紀前半の須恵器蓋（図6-1、10-968）、8世紀末・9世紀初頭以降の3-2群の瓦（図6-3、10-970）、弥生土器（図6-2、10-969）が出土している。第I・II層は各時代の様々な遺物が出土しており、特定の堆積年代を示すものではない。これは、当該調査区が斜面であるため、斜面上の平坦地で機能していた時期の遺物が流れ込んだものと考えられる。第III-1層では、16世紀代の大窯期の瀬戸美濃系中世陶器（図6-4・5、10-971・10-972）、珠洲系中世陶器（図6-6、10-973）が出土していることから、中世以降の堆積であると考えられる。

②A区の遺構の年代について

SX2599土器埋設遺構の土器（図5-1、10-961）は、赤褐色土器の小型壺で、外面に縦方向のヘラケズリが顕著にみられる。また、口縁部端面は厚ぼったい作りである。このような特徴をもつ赤褐色土器は年代比定が難しいが、諸特徴を勘案すると、9世紀後半～10世紀前半であると考えられる。SD2601溝跡からは、14世紀代のIV期の珠洲系中世陶器（図5-2、10-962）が出土しており、中世の遺構と考えられる。また、SD2601溝跡より古いSA2600材木堀跡も同様に中世の遺構と考えられる。SX2602切岸状遺構の上部の堆積層である第III-1層では、先に述べたように16世紀代の瀬戸美濃系中世陶器（図6-4・5、10-971・972）が出土していることから、これはSX2602切岸状遺構の構築年代を示している可能性が高い。

③A区の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、A区の利用状況の変遷についてまとめると表8-①のようになる。

A区ではSX2599土器埋設遺構が古代（9世紀後半～10世紀前半）に構築される。その後、調査区北側のSA2600材木堀跡の後に、中世の14世紀代のSD2601溝跡が構築される。SA2600材木堀跡の年代は明確ではないが、SD2601溝跡の位置と同位置に作られているため、同様に14世紀代の遺構と考えておきたい。その後、16世紀代に調査区南側でSX2602切岸状遺構が構築される。このように、中世は新旧二時期の遺構変遷があると考えられる。

表8 第117次調査遺構変遷表

①A区

時期	古代	14世紀代		中世 16世紀代
		SA2600 材木廻跡	→ SD2601 溝跡	
遺構名	SX2599 土器埋設遺構			SX2602 切岸状遺構

②B区

時期	古代?	中世1期遺構		中世2期遺構(16世紀後半)
		SA2604 材木廻跡	SX2608 土壘	
遺構名	SG2611 土取り穴	→ SX2607 溝跡	↓ 南側土壘	SA2605 材木廻跡 ↓ SX2609 土壘 ↓ SD2606 溝跡 ↓ 北側土壘

③C-2区

外郭 時期 区分	古代								近代
	外郭I期			外郭II期			外郭III期		
時期	8世紀第2四半期		8世紀第3四半期		8世紀第4四半期 第4四半期		8世紀第4四半期～ 9世紀第1四半期		
層序	IX層 地山 飛砂	VII層	VII-1・2層	VI層	V-2層 崩壊瓦層	V-1層 崩壊瓦層	IV層 築地崩壊土	III～I層	
遺構名	SP2626 ピット	SI2625 竪穴建物			SI2623 竪穴建物		SP2622 ピット		
			SF2624 築地廻跡						

(2) B区について

①B区の遺物包含層の年代について

B区の層序は第II章5の基本層序で述べたが、各層出土の年代比定資料をみていく。第I-1層では珠洲系中世陶器(図12-5、10-978)の他、弥生時代中期前葉～中葉の弥生土器(図12-6・7、10-979・980)が出土しているが、この他にガラス片・コンクリート片などが出土している。また、第I-3層で近世磁器が出土している(図12-9、10-982)。これらのことから第I層は近世以降の造成土であると考えられる。第II-1層では、16世紀末から17世紀初頭の貿易陶磁器染付皿F群(図12-10、10-983)が出土しており、この時期の整地層であると考えられる。また、第II-3層でも弥生土器が出土地していいる(図12-11、10-984)。

②B区の遺構の年代について

SA2604材木廻跡からは鉄製品の釘が出土しているが、その他の年代比定資料は得られていないため、詳細な年代は不明である。SD2606溝跡からは永楽通寶(図12-3、10-976)が出土しており、銭文が鮮明であり本錢である可能性が高いが、16世紀後半に流通することが知られている(註2)。このことから、SD2606溝跡は16世紀後半以降であると考えられる。一方、SD2607溝跡からは弥生土器(図12-4、10-977)しか出土しておらず、詳しい構築年代は不明であるが、SD2607溝跡は第II-1～3層で覆われており、第II-1層の年代は16世紀末～17世紀初頭であるため、少なくともこれよりは古いと考えられる。

③B区の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、B区の利用状況の変遷についてまとめると表8-②のようになる。古代の可能性がある遺構はSG2611土取り穴のみである。その後、本調査区では出土遺物が出ていないため、年代は不明であるが、周辺の調査からみて、SX2608土壙跡とSA2604木材塙跡がセットで機能していたと考えられる。また、これにSD2607溝跡が伴うと考えられる。これらを仮に中世Ⅰ期遺構と呼ぶ。その後、16世紀後半頃になると第II-1～3層でSD2607溝跡を埋め立てて、SX2609土壙跡とSA2605木材塙跡、SD2606溝跡を構築したと考えられる。これらの年代はSD2606溝跡出土の「永楽通寶」から16世紀後半と推定される。このように、中世遺構は新旧二時期があり、旧段階は南側土壙の遺構群で、新段階は北側土壙の遺構群である。新段階の遺構群は、16世紀後半であると考えられる。

(3) C-1区について

C-1区の第I層からは8世紀第3四半期の須恵器台付壺（図15-1、10-985）、第II層からは8世紀第4四半期以降の4-1群の丸瓦（図15-2、10-986）が出土しているが、これらの他にガラス片などが出土しているため、近年の造成土である。第III層からは須恵器壺（図15-3、10-987）、赤褐色土器甕（図15-4、10-988）が出土しており、古代より新しい遺物は出土しない。

C-1区から検出された遺構はSP2621ピットのみであり、古代の外郭区画施設等の発見はなかった。

(4) C-2区について

①C-2区の遺物包含層の年代について

第I層からは珠洲系中世陶器の壺R種（図25-8、11-006）、肥前陶磁器碗（図25-9、11-007）が出土し、第III層からは8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の須恵器壺・蓋（図25-10～12、11-008～010）が出土しているが、第I～III層はガラス片などが出土し、近代以降の造成土である。第IV層以下は古代の遺物しか出土しないため、古代の整地層であると考えられる。

第IV層からは8世紀第4四半期に位置づけられる須恵器壺（図26-4～7、11-014～017）、台付壺（図26-8・9、11-018・019）、9世紀第1四半期の赤褐色土器壺（図26-12・13、11-022・023）、長胴甕（図26-14、11-024）が出土している。また、瓦は8世紀末・9世紀初頭以降の4-1群（図27-2、11-026）、4-2群（図27-1・3、11-025・027）が出土している。これらのことから、第IV層は8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の整地層であり、築地塙由来の粘土なども含まれることから、築地塙の崩壊土層であると考えられ、外郭Ⅲ期に相当すると考えられる（表9）。

第V-1層からは瓦が多量に出土していることから築地塙の崩壊瓦層と考えられる。出土遺物は、8世紀前葉～中葉の頭部に沈線状の段のある土師器甕（図27-5～7、11-029～031）が出土している。一方で、瓦は、秋田城創建期の1-2群（図28-2・3、図29-2・3、11-035・036・040・041）・1-3群（図27-9、11-033）、8世紀後半の2群（図28-4、11-037）、8世紀末から9世紀初頭以降の4-1群（図28-1・図29-1・4、11-034・11-039・11-042）、4-2群（図28-5、11-038）など多様な時期のものが出土している。これらのことから、第V-1層は外郭Ⅱ期であると考えられるが、その中でも後半段階に位置づけられる8世紀第4四半期頃の堆積であると推定される。

第V-2層も瓦が多量に出土していることから築地塙の崩壊瓦層と考えられる。出土遺物は、8世紀前葉から中葉の頭部に沈線状の段のある土師器甕（図29-5、11-043）が出土している。瓦は、秋田城

表9 秋田城遺構変遷表

	733	750 760	800	830	850	878	900	915	950
政庁	I期	II期 築地塀 材木列塀	III期	IV A期 一本柱列塀	IV B期 一本柱列塀	V期	VI期		
政庁区画施設	築地塀	築地塀 材木列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	材木列塀	一本柱列塀		
外郭	I期	II期	III期 (小期あり)	柱列塀	IV期 (小期あり)	V期			
外郭区画施設	瓦葺き築地塀	非瓦葺き築地塀			材木列塀	大溝			
大畠地区	I期	II期 生産施設	III期 生産施設整備 居住城住居数増加	IV期 生産施設充実	V期	官衙建物			
焼山地区	I期 A類建物 A類建物倉庫	II期 B類建物 B類建物倉庫群か?	III期 (小期あり) C類建物 C類建物倉庫群		D類建物?				
葛ノ木地区	I期	II期	III期	IV期	V期				
外郭西門	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期			
時期	天平5年(733)~	8C後半前葉~	8C末~9C初 9C第2四半期~	9C第3四半期~	元慶2年(878) ~	10C第2四半期 ~10C中葉			
備考	秋田出羽柵創建期	天平宝字年間 「秋田城」改修期	第III期全体 大改修期	天長7年 (800) 大地壘築 度廻塀	元慶の乱で 焼失	元慶の乱 (878)後 復興期	最終末期		

創建期の1-2群（図30-1・2・4・6、11-045・046・048・050）、1-3群（図30-5、11-049）が出土し、8世紀第2四半期の創建期の瓦のみ出土している。これらのことから、第V-2層は外郭II期であると考えられるが、その中でも前半段階に位置づけられる8世紀第3四半期頃の堆積であると推定される。

第VI層は、SF2624築地塀跡の大走り部分（第VII-1・2層）の上部に堆積している層で8世紀前葉～中葉の頸部に沈線状の段がある土師器甕（図31-1、11-051）が出土している。この層も外郭II期の8世紀第3四半期頃の堆積であると考えられる。

第VII-1・2層は、SF2624築地塀跡の大走り部分を構成する堆積層である。第VII-1層上面からは、1-2群（図31-2・3、11-052・053）の8世紀第2四半期の創建期瓦のみ出土している。第VII-2層からは8世紀前葉～中葉の土師器甕の口縁部破片（図31-4・5、11-054・055）が出土している。これらのことから、第VII-1・2層は外郭I期の8世紀第2四半期に位置づけられる。

②C-2区の遺構の年代について

SI2623堅穴建物跡のカマド埋土からは8世紀第3四半期の須恵器壺（図23-1～3、10-989～991）・台付壺（図23-4、10-992）が出土している。また、瓦は8世紀後半の2群（図24-4、10-998）が埋土から出土している。これらのことから、SI2623堅穴建物跡は8世紀第3四半期と考えられる。その他、土師器の甕が出土しており、小型の平底甕（図23-5、10-993）と大型の甕（図23-6・図24-1、10-994・995）が出土しており、当該期の土師器甕の形態的特徴・セット関係を知る上で貴重な一括資料である。

SF2624築地塀跡の積土中からは8世紀前葉から中葉の土師器甕（図25-1、10-999）、秋田城創建期

に位置づけられる1~2群の瓦（図25-2、11-000）が出土している。このようにSF2624築地跡から出土する遺物は、外郭Ⅰ期のものではなく、外郭Ⅱ期に積み替えられた部分であると考えられる。

最下層から出土したSI2625堅穴建物跡からは、8世紀第2四半期に位置づけられる底部および体部下端にケズリ調整を施す須恵器坏（図25-3、11-001）、底部回転ヘラ切り後丁寧なナデ調整を施す須恵器坏（図25-4、11-002）が出土している。このことから、SI2625堅穴建物跡は秋田城創建期の8世紀第2四半期と考えられる。また、これに伴って、土師器の小型甕（図25-6、11-004）と大型甕（図25-7、11-005）の口縁部破片がセットで出土している。

③C-2区の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、B区の利用状況の変遷についてまとめると表8-③のようになる。秋田城創建期である8世紀第2四半期には第Ⅶ層および第Ⅷ-1・2層が堆積していたと考えられる。SF2624築地跡は秋田城創建期の外郭Ⅰ期に存在したと考えられるが、これより古いSI2625堅穴建物は、築地跡が構築される前に同位置に存在していた遺構である。SF2624築地跡の積土からは丸瓦と土師器の破片が出土したことから、積土自体は外郭Ⅱ期の作り替え時のものと考えられる。崩壊瓦層の下層である第V-2層掘り込みのSI2623堅穴建物跡とSF2624築地跡は同時に存在していたと考えられ、これらは8世紀第3四半期と考えられる。これより上層の崩壊瓦層である第V-1層は8世紀第4四半期に相当すると考えられ、この段階ではSI2623堅穴建物跡は廃絶しており、第VI・V-2・V-1層の堆積までが外郭Ⅱ期に相当すると考えられる。第IV層は8世紀第4四半期から9世紀第1四半期の築地崩壊土であり、外郭Ⅲ期に位置づけられる。外郭Ⅲ期以降の外郭区画施設は、近代以降の削平により大部分が失われており、確認できなかった。

2 古代秋田城北西地区の外郭線について

C-2区においてSF2624築地跡を検出したことにより、焼山地区北西部の外郭線について、全体を把握することができた（図32）。焼山地区北西部外郭線は、第102次調査地の外郭西門の北側からクラシク状に延び（SF2238・SF2239）、そこから北側に屈曲し第106次調査地C区（SF2352A・B）、第106次調査D区（SA2313・2314、SF2315）、第105次調査地D区（SA2310・2311、SF2312）、第105次調査地A区（SA2298・2299、SF2300A・B）、第106次調査地E区（SA2367・2368、SF2369）を通り、今回の調査地である第117次C-2区（SF2624）に至る。このような秋田城北西隅の外郭線をみると、外郭西門から北側へ張り出し、秋田城全体構造からみれば、北西部が張り出しているといえる。この理由は今後検討を要するが、秋田城の中で標高が最も高い第106次D区で発見された櫓状建物（SB2356・2357）を設置し、眺望を確保するため、というのも一つの理由であると考えられるだろう。

3 中世城館としての焼山地区とA・B区の調査成果について

第117次調査地A・B区の調査により、中世城館としての焼山地区について把握することができた（図33）。

第117次B区で検出されたSA2604材木跡・SX2608土壙跡は、第106次B区北側のSA2335・2336材木跡の延長であると考えられる。また、このような材木跡は、第106次B区南側のSA2337・2338材木跡と対になるものと考えられる。SA2338材木跡の布掘り埋土からは、14世紀末～15世紀中葉と考えられ

る珠洲系中世陶器が出土しており、14～15世紀代に台地上を区画していた時期があったと考えられる。同様に今回の第117次調査A区で検出されたSD2601でも14世紀代の珠洲系中世陶器が出土している。

さらに、第117次B区で発見されたSX2609土壙跡・SA2605材木堀跡に類似する遺構は、第103次C区(SX2271)、第103次A区(SX2265、SA2266)、第92次B区(SX2003・2004、SA2005・2006)でも発見されている。特に第92次B区では、中世の八脚門(SB2002)も発見されている。出土遺物の検討から、第103次A区の土壙(SX2265)土壙跡、第92次B区の八脚門と土壙等の遺構群(SX2003・2004、SA2005・2006)は16世紀後半以降であると考えられている(註3)。このことは、今回の第117次B区北側の中世2期遺構(SX2609・SA2605・SD2606)を16世紀後半以降とした所見と一致する。

以上のことから総合して考えると、秋田城北西部における中世城館は外郭と内郭の二重構造であり、内郭の区画施設は14世紀代までに遡る可能性があり、外郭は16世紀後半以降と考えられ、時期差があると考えられる。

中世に秋田平野で活躍した安東氏の動向を参照すると(註4)、内郭が形成された時期は、津軽十三湊の安東鹿季が「秋田湊」に進出してきた応永年間(1394～1428)頃に遡る可能性がある。一方、外郭を増設した時期は、天正17年(1589)の湊合戦の頃にあたると考えられる。『奥羽永慶軍記』によれば、湊合戦時に「寺内合戦」があり、「寺内の砦」があったことが記載されており、秋田城北西部のこれらの中世遺構は、この「寺内の砦」に相当する可能性が高いといえるだろう。

4 第117次調査の成果と課題

第117次調査の結果により、以下の5点について成果と課題があった。

- ①A区で、斜面落ち際にSA2600材木堀跡とSD2601溝跡、斜面下にSX2602切岸状遺構が発見され、中世城館に特徴的な遺構が確認できた。
- ②B区では、これまでの調査で発見されていた中世城館としての遺構を再確認することができた。内郭の区画施設としてSA2604材木堀跡・SX2608土壙跡・SD2607溝跡、外郭の区画施設としてSA2605材木堀跡・SX2609土壙跡・SD2606溝跡を確認できた。
- ③秋田城北西部にあった中世城館は、基本的に二重構造であり、内郭区画施設は安東氏が秋田平野に進出してきた14世紀代に構築された可能性があり、外郭区画施設は、天正17年(1589)の湊合戦の頃である16世紀後半に増設された可能性が考えられる。
- ④C-2区において、SF2624築地堀跡を発見した。この築地堀の発見により、焼山地区での外郭線を把握することができた。

註1 各時代の出土遺物の年代比定および分類については、下記の論考に基づき記述する。

①弥生土器

根岸洋 2005 「志藤沢式土器の研究(1)～秋田大学所蔵資料の再報告を中心に～」『秋田考古学』49 pp. 1-33

根岸洋 2006 「志藤沢式土器の研究(2)－秋田県内の弥生前期・中期の土器編年について」『秋田考古学』50 pp. 1-23

根岸洋 2007 「もう一つの志藤沢式土器－奥山潤氏の型式設定資料をめぐって－」『秋田考古学』51 pp. 27-36

根岸洋 2022 「北東北の弥生時代中期の位置づけ」『北東北三県合同シンポジウム 北東北の弥生時代中期を考える』秋田考古学協会 pp. 1-21

②古代(土器)

- 小松正夫 1992 「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）－第54次調査の木簡・漆紙文書伴出土器を中心にして－」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.139-144
- 伊藤武士 1997 「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』7 pp.32-44
- 小松正夫・日野久・西谷隆・伊藤武士 1997 「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年（試案）」『日本考古学協会 1997年度秋田大会報表・律令国家・日本海シンポジウムII・資料集-』pp.18-30
- 秋田市 2001 「第7章 秋田城跡の発掘調査 九 秋田城跡出土の土器編年」『秋田市史 第7巻 古代 史料編』 pp.383-390
- 秋田市教育委員会 2007 「秋田城跡の土器編年」『秋田城跡II-鶴ノ木地区-』pp.340-345
- 神田和彦 2010 「ケズリのある赤い壺—古代秋田郡域の赤褐色土器壺B—」『北方世界の考古学』すいれん舎 pp.187-210

③古代（瓦）の分類

秋田市教育委員会 2009 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2008』

表10 秋田城出土瓦の分類

分類	細分	色調	焼成	質	備考	時期区分	年代
1群	I-1群	灰白	良好・やや不良	軟質	・丸瓦は無段タイプのみ	政序I期 (外郭I期)	8世紀 第2四半期
	I-2群	灰色					
	I-3群	黒色（いなし焼成）					
2群		青灰・灰・暗灰	良好・堅緻	硬質	・砂粒が多い ・平瓦では特に凸面に砂粒が目立つ ・補修瓦が	政序II期 (外郭II期)	8世紀後半
3群	3-1群	暗灰～灰	良好・堅緻	硬質	・丸瓦は有段タイプ ・平瓦は板状工具でナデ調整 ・成形時に粘土板を重ねた痕跡 ・古城削葉跡産か	政序III期以降 (外郭III期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	3-2群	灰・灰黄・黄灰					
4群	4-1群	褐色系を主体	やや不良	軟質	・丸瓦は有段タイプ	政序III期以降 (外郭III期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	4-2群	黄灰・ にぶい黄灰～褐灰色					

※秋田市教育委員会2009「IV 考察 ⑤外郭西門跡および周辺出土の瓦について」をもとに作成

④中世陶磁器

吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

藤澤良祐 2002 『瀬戸・美濃大黒編年の再検討』『財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要』第10輯 pp.53-176

小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 pp.71-88

⑤肥前系陶磁器

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』

註2 永井久美男 2001 「模鋳鏡の全国的様相」『中世の出土模鋳鏡』高志書院 pp.59-85

註3 秋田市教育委員会 2009 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2008』

秋田市教育委員会 2014 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2013』

註4 神田和彦 2012 「安東氏と秋田湊」『歴史』第119輯 pp.59-85

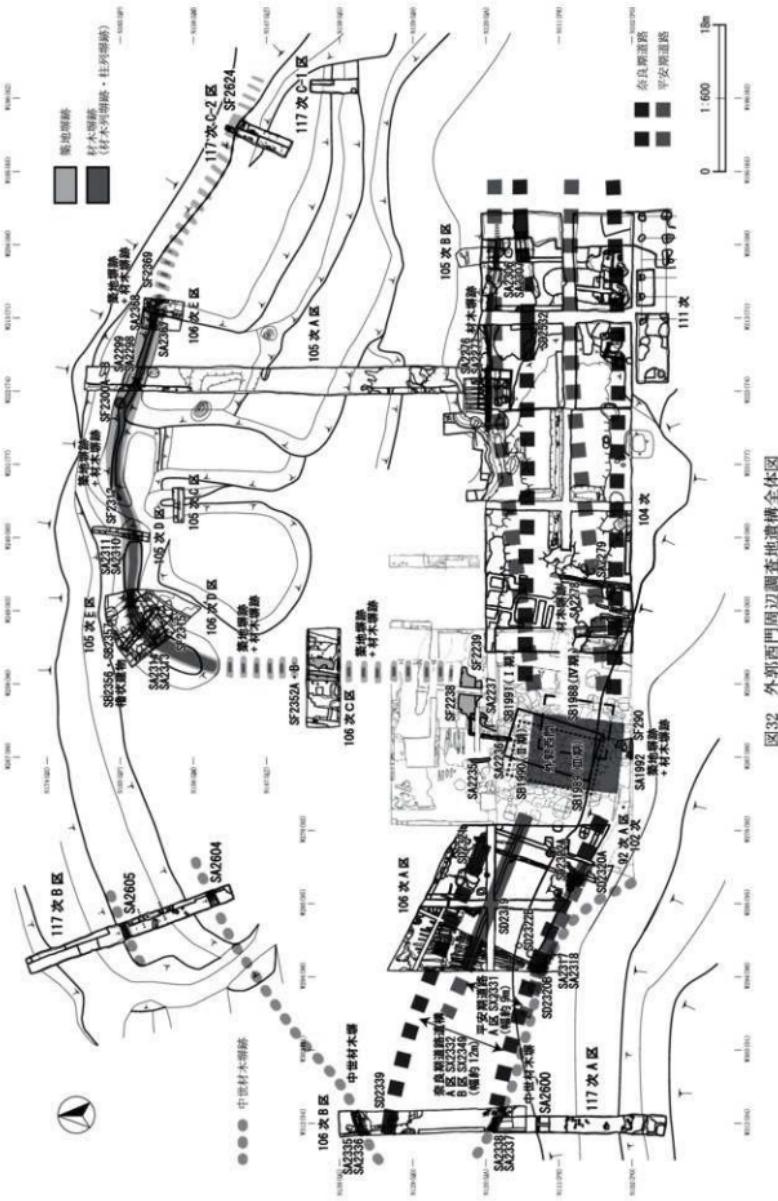
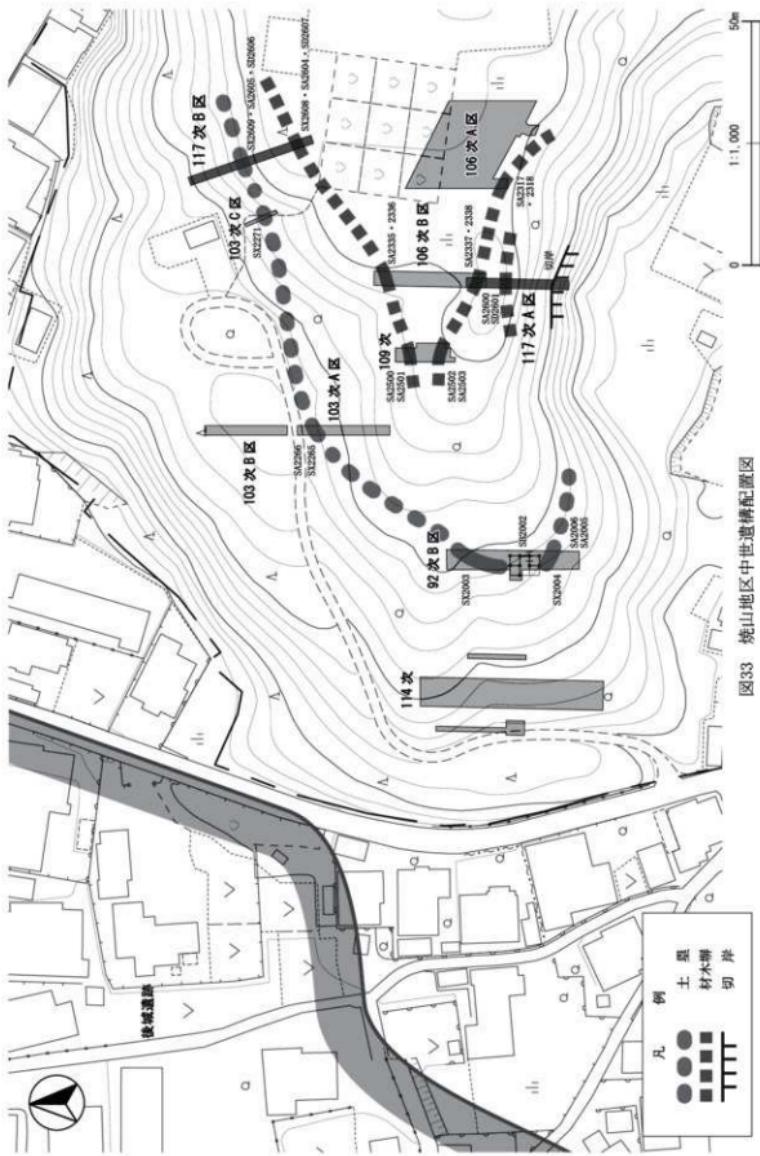


圖32 外郭西門周邊調查地圖



IV 秋田城跡公開活用事業

史跡秋田城跡を、市民の郷土学習の場として有効活用を図るために、令和4年度は下記の事業を実施し、全体で5,804名の参加者がいた。

1 学習講座（春期：5月19日～21日、冬季：2月9・10日）

秋田城跡全般について発掘調査成果、文献史料、環境整備事業等を学んでもらう市民講座を開催した。郷土学習の機会として秋田城跡の周知を図るとともに、ボランティアガイド養成講座も兼ねる。参加者27名。

2 史跡探訪会（6月4日）

市街地内にありながら、良好に保存された自然環境の観察を通じ、史跡指定による環境保全の側面も理解してもらうことを目的とし、史跡内を散策、動植物観察を行った。参加者17名。

3 発掘体験教室（7月9日）

小中学校を対象に発掘調査を実際に体験することを通じ、地域の歴史や秋田城跡への理解と関心を深めてもらうことを目的として体験教室を開催した。参加者9名。

4 史跡秋田城跡パネル展（8月2日～8月30日・秋田市ポートタワーセリオン、9月10日～9月25日・秋田市民俗芸能伝承館旧金子家住宅、10月12日～10月23日・イオン土崎港店、11月25日～12月9日・秋田市役所1階市民ホール）

市内の観光施設および商業施設の展示会場4箇所で、一般市民、近隣の小中学生を対象に、秋田城についてわかりやすく解説したパネル展を開催した。また、パネル展のテーマに合わせた「秋麻呂くん通信」を発行し、会場で配布している。令和4年度のテーマは「秋田城跡発掘調査成果特集－秋田城発掘調査50周年記念－」で行った。見学者は、ポートタワーセリオン147名、民俗芸能伝承館423名、イオン土崎港店528名、秋田市役所1階市民ホール378名。

5 史跡散策会（9月3日）

一般市民を対象に、ボランティアガイドの説明による史跡内の散策会を開催した。参加者7名。

6 東門ふれあいデー（10月2日）

秋田城跡外郭東門周辺を会場として、史跡の保護と活用を推進するために、地域住民と共に各種イベントを開催した。ボランティアガイドの会等関係団体、地域住民による支援団体、地元町内会からなる実行委員会の主催、運営で行われ、歴史資料館としては情報発信のためのパネル展示、のぼりの製作・活用、リーフレットの配布等を行った。参加者2,131名。

7 第117次発掘調査現地説明会（7月23日）

寺内焼山地区的発掘調査成果を公開した。参加者44名。

8 出前講座（高清水小学校6年生、寺内小学校6年生、その他各種団体）

秋田城跡について出土遺物や遺構の画像等を用い解説する講座を実施した。生徒に秋田城跡への関心や理解を深めてもらう機会とするため、郷土学習の授業の一環として歴史資料館職員が講師となり授業を担当した。また一般市民の各種団体の講座講師を務めた。参加数229名。

9 歴史資料館企画展（前期7月23日～8月28日、後期12月17日～1月29日）

秋田城跡や周辺遺跡から出土した資料から、古代の秋田について興味や関心を深めてもらうことを目的とし開催した。夏と冬の2回行った。見学者は前期1,485名、後期379名。



学習講座



史跡探訪会



発掘体験教室



パネル展（市民ホール）



史跡散策会



東門ふれあいデー



現地説明会



出前授業

V 秋田城跡現状変更

秋田城跡歴史資料館では、秋田城跡の発掘調査や環境整備事業、史跡の管理・活用の他に、現状変更に伴う調査を実施して、史跡内の遺構や歴史的景観の保護に努めている。しかし、史跡内は歴史的・自然的環境を活かすと同時に、居住地であることから住民のより良い住環境の整備も必要であり、現状変更の必要性も生じてくる。そこで、やむなく史跡内の現状を変更する場合は、秋田市教育委員会が窓口となって申請者および関係機関と史跡保護のための協議を慎重に行い、史跡への影響がない範囲で最小限の対応を行っている。

令和4年の現状変更申請は11件であったが、掘削が最小限で、現状変更が軽微なものについては工事の際に立会調査を、その他については発掘調査を行って対応した。その内容は下記のとおりである。

- ①民間工事10件…住宅新築・増築・解体工事（1・3・4・7・8・10）、工作物等の設置（5・6・11）、植樹等（9）②史跡の保護や保存に係わるもの1件…発掘調査（2）

表11 現状変更一覧

番号	申請者	申請地	変更事項	申請年月日	許可年月日・番号	対応
1	個人	秋田市荒桜二丁目169番1、169番2、169番3、170番2	住宅解体	令和4年1月12日	令和4年1月13日 秋市教指令第552号	立会調査
2	秋田市	秋田市寺内焼山89番、176番、226番	発掘調査	令和4年2月3日	令和4年3月18日 3文字第2829号	発掘調査
3	個人	寺内鶴ノ木2番2	住宅解体	令和4年2月25日	令和4年3月1日 秋市教指令第88号	立会調査
4	個人	秋田市荒桜二丁目169番1、169番2、169番3、170番2	住宅新築	令和4年3月1日	令和4年3月1日 秋市教指令第91号	立会調査
5	個人	寺内大畑1番14	曲り棒設置	令和4年4月8日	令和4年4月14日 秋市教指令第175号	立会調査
6	個人	寺内高野1番11	フェンス設置	令和4年5月9日	令和4年5月12日 秋市教指令第185号	立会調査
7	個人	寺内大小路5番29	住宅・土留解体	令和4年5月11日	令和4年5月12日 秋市教指令第186号	立会調査
8	個人	寺内大小路5番29	住宅新築	令和4年6月20日	令和4年6月22日 秋市教指令第230号	立会調査
9	秋田港ロータリークラブ	寺内焼山144番6、166番1	桟橋板、櫻柱設置	令和4年7月6日	令和4年9月9日 4文字第2062号	立会調査
10	株式会社カチタス	将軍野南一丁目178番14	住宅リフォーム	令和4年7月28日	令和4年8月1日 秋市教指令第234号	立会調査
11	個人	寺内大小路87番、87番1	アスファルト撤去、コンクリート打設	令和4年10月18日	令和4年10月20日 秋市教指令第251号	立会調査



①第117次調査地A区全景（南東から）



②第117次調査地B区全景（南西から）



①第117次調査地C-2区S12623堅穴建物跡掘り下げ状況（南から）



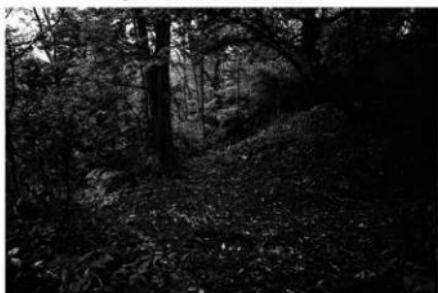
②第117次調査地C-2区SF2624築地塀跡検出状況（南東から）



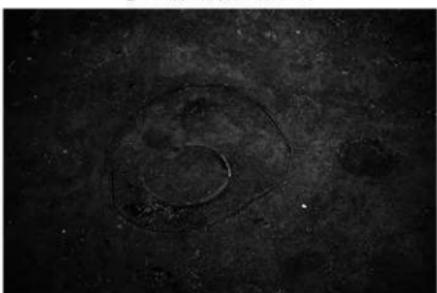
① A区調査前状況（南東から）



② B区調査前状況（北から）



③ C区調査前状況（西から）



④ A区SX2599土器埋設遺構検出状況（南から）



⑤ A区SX2599土器埋設遺構半裁状況（南から）



⑥ A区SD2601溝跡検出状況（東から）



⑦ A区SD2601溝跡掘り下げ状況・SA2600材木埋跡検出状況（東から）



⑧ A区SA2600材木埋跡（南から）



① A区SX2602切岸状遺構検出状況（南東から）



② B区SA2604材木縫跡半裁状況（東から）



③ B区SA2604材木縫跡半裁状況（南から）



④ B区SA2605材木縫跡検出状況（西から）



⑤ B区SA2605材木縫跡半裁状況（南から）



⑥ B区SA2605材木縫跡半裁状況（西から）



⑦ B区SD2606溝跡半裁状況（北西から）



①B区 SD2607溝跡半裁状況（北西から）



②B区 SX2608土壌跡（北東から）



③B区 SX2609土壌跡（北東から）



④C-1区第IV層面検出状況全景（北西から）



⑤C-1区SP2621ピット検出状況（東から）



⑥C-2区第IV層崩壊地崩壊土粘土ブロック検出状況（南から）



⑦C-2区第V-1層崩壊瓦検出状況（西から）



①C-2区第V-1層崩壊瓦検出状況全景（南から）



②C-2区第V-2層面・SI2623竪穴建物検出状況全景（南から）



③C-2区第V-2層SI2623竪穴建物掘り下げ状況全景（南から）

④C-2区第V-2層SI2623竪穴建物掘り下げ状況（南東から）



⑤C-2区第V-2層SI2623竪穴建物カマド掘り下げ状況（東から）



①C-2区SF2624築地跡検出状況（南東から）



②C-2区SF2624築地跡検出状況（南東から）



③C-2区SF2624築地跡ビット群掘り下げ状況（西から）



④C-2区SF2624築地跡付近土層断面（東から）



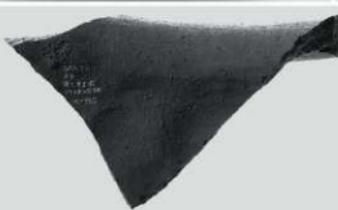
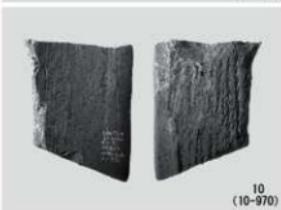
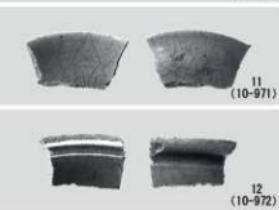
⑤C-2区SI2625堅穴建物跡掘り下げ状況全景（南から）



⑥C-2区SI2625堅穴建物跡掘り下げ状況（南東から）



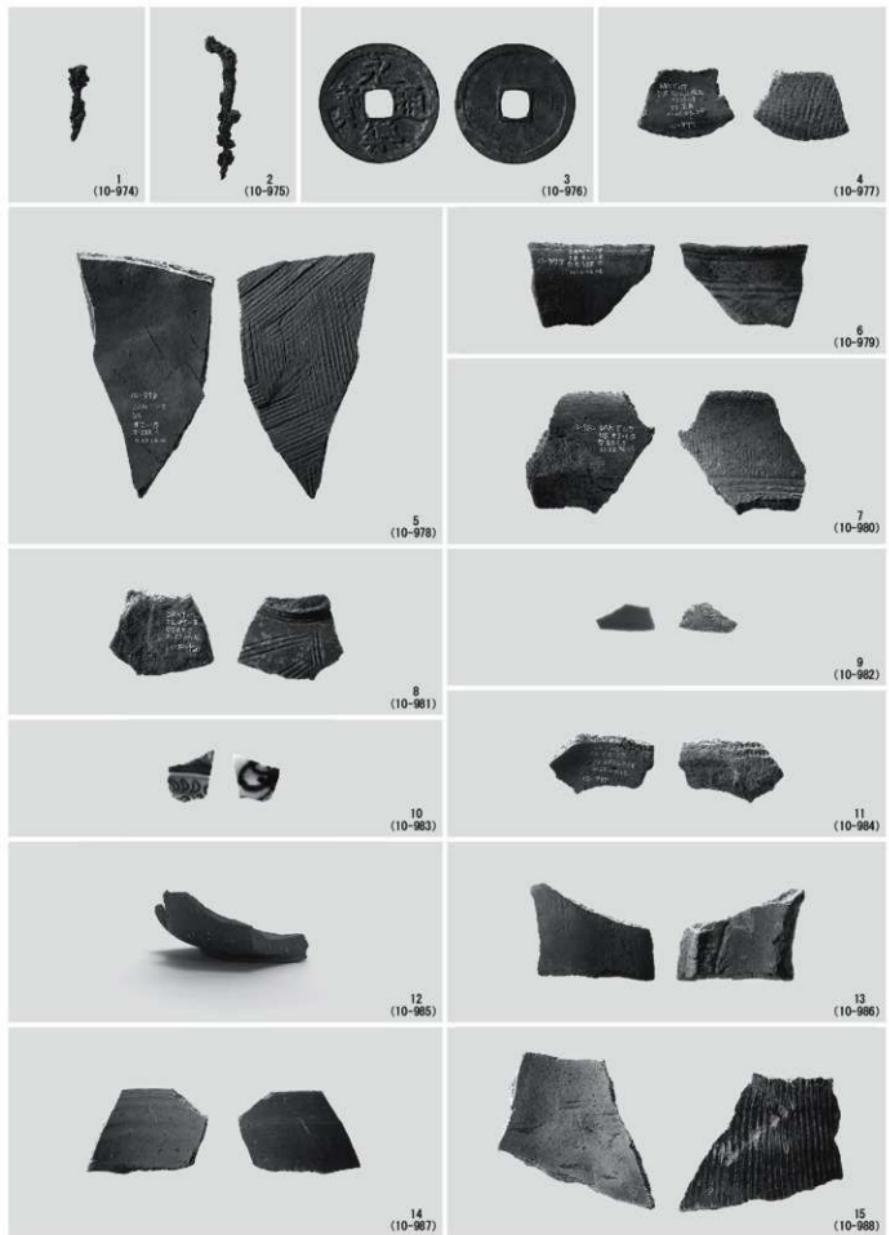
⑦C-2区SP2626ビット検出状況（北西から）

1
(10-961)2
(10-962)3
(10-963)4
(10-964)5
(10-965)6
(10-966)7
(10-967)8
(10-968)9
(10-969)10
(10-970)11
(10-971)12
(10-972)13
(10-973)

1 A区SX2599 2 A区SD2601 3~7 A区第I层 8~10 A区第II层 11~13 A区第III-1层
(7は1/1、10は1/4、それ以外は2/5)

図版 8

A区出土遺物



1・2 B区SA2604 3 B区SD2606 4 B区SD2607 5～8 B区第I-1層 9 B区第I-3層
 10 B区第II-1層 11 B区第II-3層 12 C-1区第I層 13 C-1区第II層 14・15 C-1区第III層
 (1・2は1/2、3は1/1、13は1/4、それ以外は2/2)

B区・C-1区出土遺物

図版 9



1
(10-989)



2
(10-990)



3
(10-991)



4
(10-992)



5
(10-993)



6
(10-994)



7
(10-995)



8
(10-996)



9
(10-997)

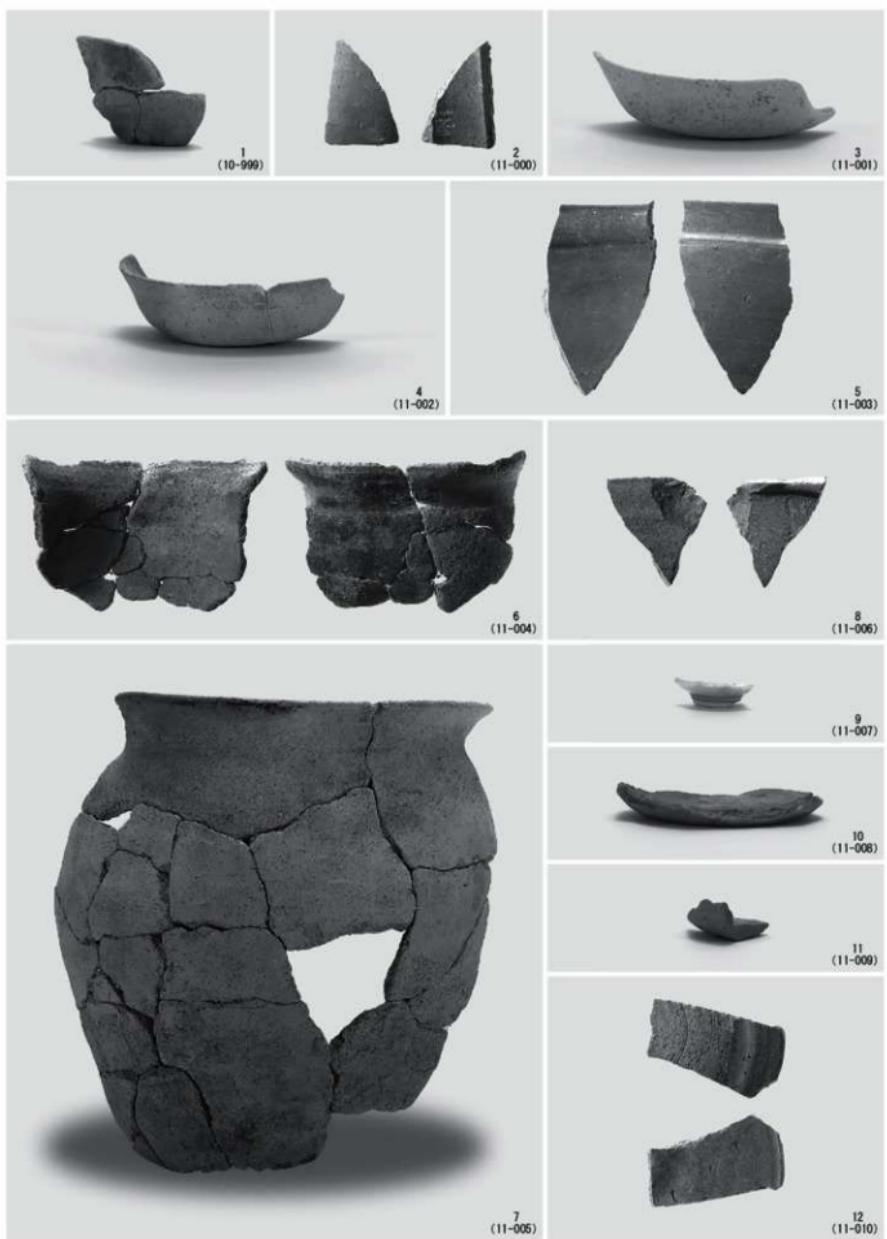


10
(10-998)

1 ~ 10 C - 2 区 S12623 (9・10は1/4、それ以外は2/5)

図版10

C - 2 区出土遺物



1・2 C-2区SF2624 3~7 C-2区SI2625 8・9 C-2区第I層 10~12 C-2区第III層
(2は1/4、それ以外は2/5)

C-2区出土遺物



11-012



11-015



11-018



11-020



11-022

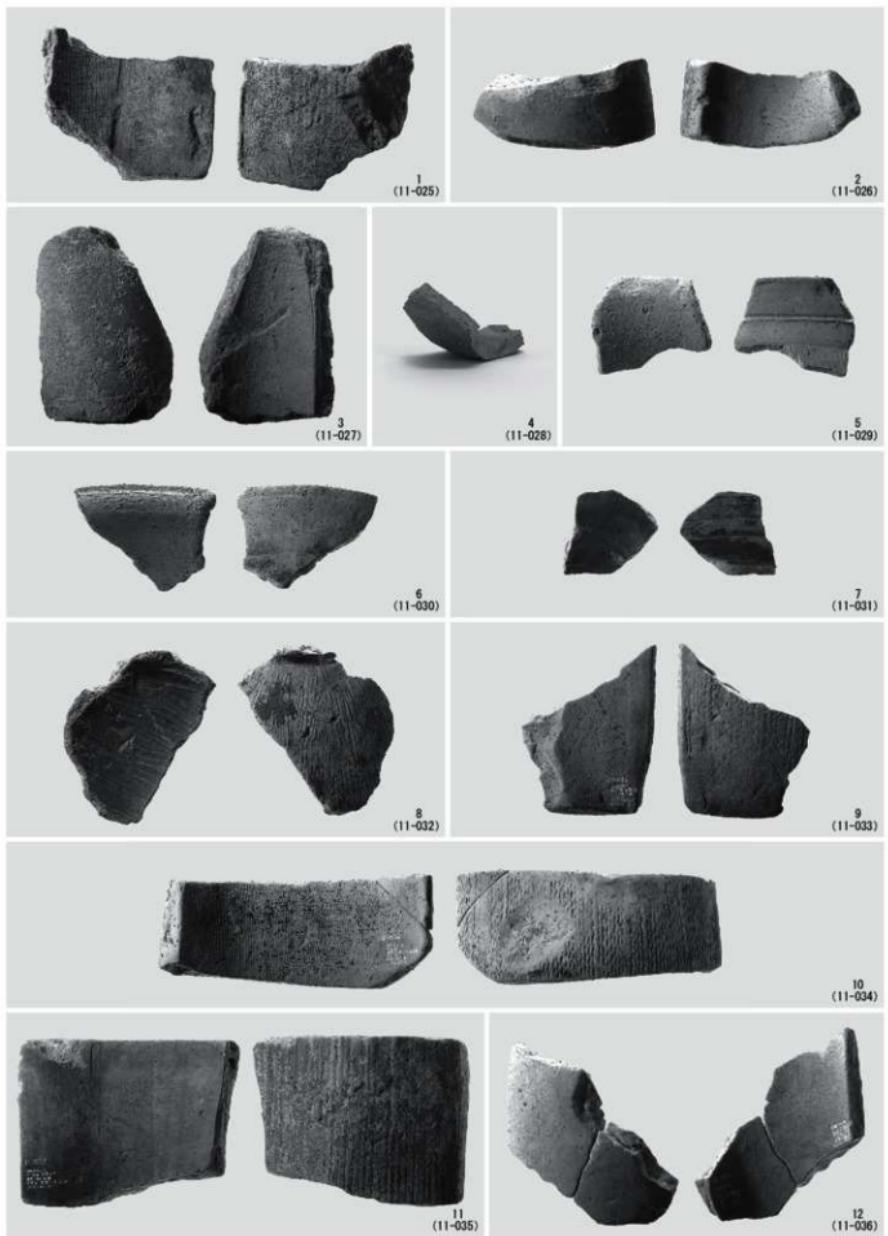


11-023

1～3 C-2区第III層 4～14 C-2区第IV層
(2は1/2、3は1/4、それ以外は2/5)

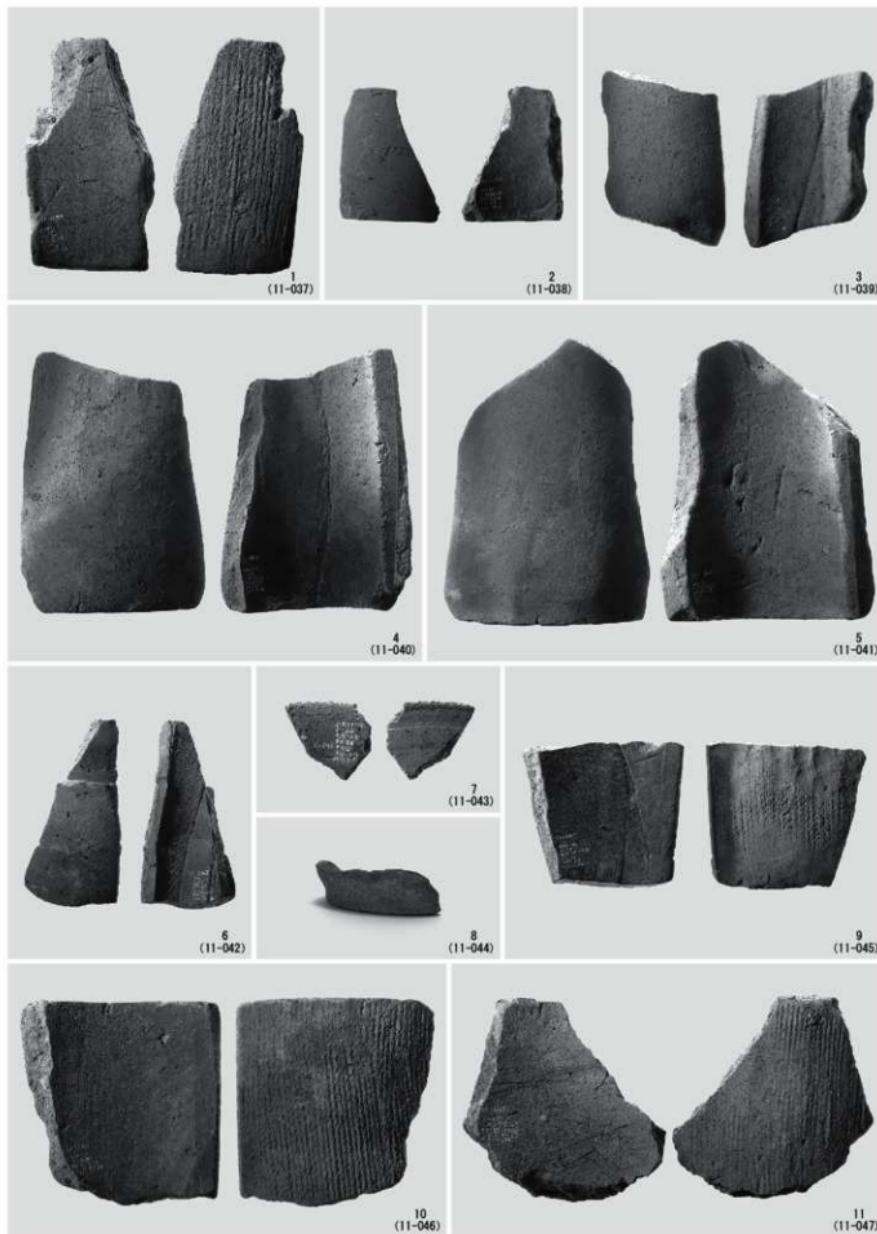
図版12

C-2区出土遺物



1～3 C-2区第IV層、4～12 C-2区第V-1層
 (4～8は2/5、それ以外は1/4)

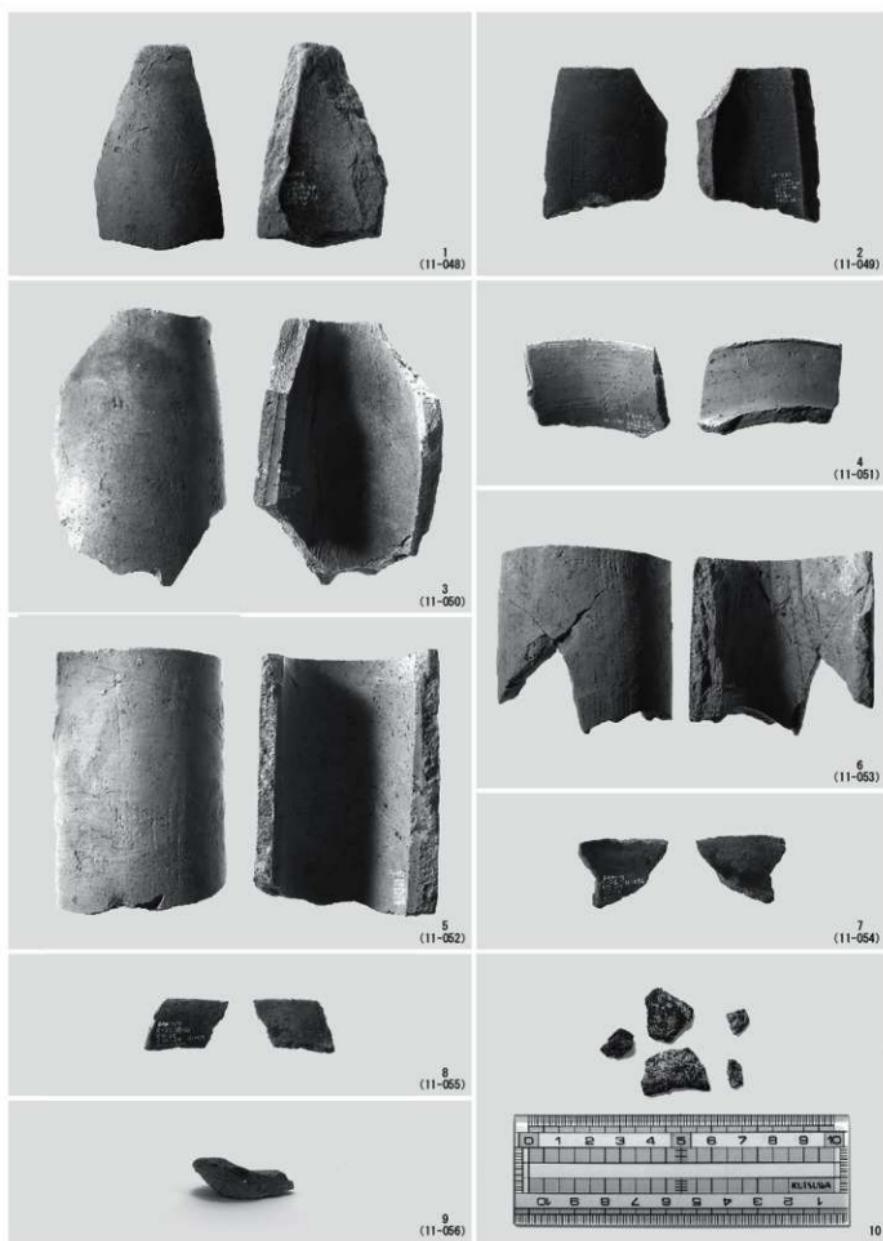
C-2区出土遺物



1~6 C-2区第V-1層 7~11 C-2区第V-2層
(7・8は2/5、それ以外は1/4)

図版14

C-2区出土遺物



1~3 C-2区第V-2層 4 C-2区第VI層 5・6 C-2区第VII-1層 7~9 C-2区第VII-2層
 10 SX2599埋設土器内出土骨片 (1~3・5・6は1/4、4・7~9は2/5、10は縮尺任意)

C-2区出土遺物

図版15

報告書抄録

ふりがな	あきたじょうあと						
書名	秋田城跡						
副書名	秋田城跡歴史資料館年報2022						
卷次	2022						
シリーズ名	秋田城跡歴史資料館年報						
シリーズ番号							
編著者名	神田和彦						
編集機関	秋田市立秋田城跡歴史資料館						
所在地	〒011-0907 秋田県秋田市寺内焼山9番6号 TEL: 018-845-1837 FAX: 018-845-1318						
発行年月日	2023年3月28日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査 原因
秋田城跡	秋田市内	05201	39度 44分 20秒	140度 05分 ~ 00秒	第117次 20220511 ~ 20220830	123	保護管理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
秋田城跡 第117次調査	城柵官衙 遺跡	奈良・ 平安・ 中世	【A区】土器埋設遺構1基、材木塀跡1条、溝跡1条、切岸状遺構1基、ピット1基 【B区】材木塀跡2条、溝跡2条、土塁跡2基、土坑1基、土取り穴1基、ピット9基 【C-1区】ピット1基 【C-2区】築地塀跡1基、竪穴建物跡2棟、ピット2基	須恵器、土師器、赤褐色土器、綠釉陶器、瓦、鉄製品、磁器、石器、錢貨	A・B区では中世の区画施設を確認。 C区では古代秋田城の外郭区画施設を確認。		
要約	<p>A区では台地上の斜面落ち際に溝跡と材木塀跡、斜面下部に切岸状遺構を発見し、中世城館に特徴的な遺構を確認した。</p> <p>B区では材木塀跡・土塁跡、溝跡の中世遺構のセットが、二重に確認された。こうした区画施設は、焼山地区北西部でこれまでも確認されており、これまでの調査を総合すると、内郭は14世紀代、外郭は16世紀後半であると考えられた。</p> <p>C区では、C-2区において、築地塀跡の一部を発見し、焼山地区での外郭線を把握することができた。</p>						

秋田城跡歴史資料館要項

I 組織規定

秋田市立秋田城跡歴史資料館条例 拠綱（平成27年12月21日 条例第62号）

第1条

史跡秋田城の保護および管理、調査研究、整備、公開ならびに活用を通じ、市民の教育と文化の向上に資するため、秋田市立秋田城跡歴史資料館（以下「歴史資料館」という。）を秋田市寺内焼山9番6号に設置する。

第2条

歴史資料館において行う事業は、次に掲げるものとする。

- (1) 史跡秋田城跡の保護および管理に関すること。
- (2) 史跡秋田城および関連遺跡の調査研究に関すること。
- (3) 史跡秋田城の整備および公開に関すること。
- (4) 史跡秋田城跡および関連遺跡の出土品および調査成果の展示および普及に関すること。
- (5) 史跡秋田城跡についての学習活動の支援等に関すること。
- (6) 関係機関および関係団体等との連携に関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、歴史資料館の設置の目的を達成するために必要と認める事業。

II 発掘調査体制

1 調査体制

秋田市

秋田市長	徳 積 志
観光文化スポーツ部長	納 谷 信 広

調査機関

秋田市立秋田城跡歴史資料館

館長	佐 藤 鋼 一		
事務長	岡 部 友 明		
調査・普及担当		管理運営担当	
主席主査	神 田 和 彦	主席主査	菅 沼 隆
主席主査	伊 藤 千 秋	主席主査	千 葉 孝 之
主席主査	畠 山 隆	主査	能 登 園 美
会計年度任用職員	阿 部 美 徳	主査	工 藤 伸 吾

2 調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所

3 作業職員

発掘調査作業職員：加賀谷久仁男、富野三千雄、照井稔、佐藤敏昭、武藏紀博、高橋芳樹、宮田美奈子、

最上谷江梨子

整理作業職員：森泉裕美子、伊藤雅子、宮田美奈子

秋田城跡（秋田城跡歴史資料館年報2022）

印刷・発行 令和5年3月28日
編 集 秋田市立秋田城跡歴史資料館
〒011-0907 秋田市寺内焼山9番6号
TEL 018-845-1837 FAX 018-845-1318
印 刷 秋田印刷製本株式会社

三

